
私の彼は副社長

内海 さくら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私の彼は副社長

【Nコード】

N7462I

【作者名】

内海 さくら

【あらすじ】

寂れた商店街の一角にある『はなみ花屋』の店主、葉子。そんな花屋に突然現れた白馬の王子さまは、葉子の敵かたきとなる人だった。

出会い編 第1話（前書き）

登場人物

はなみよつこ
羽並葉子 25才。独身女性。

寂れた商店街の一角にある祖母の代から続く『はなみ花屋』
という店の店主。

負けず嫌い人情に厚い性格。スポーツは苦手。

おんだますみ
恩田真純 25才。独身男性。

株式会社FIEフィットネスクラブスポーツ副社長。ある目
的のために葉子に

近づいた。お客と女性には優しいが、仕事に関しては鬼とも
言われている。

スポーツ全般こなせるが、得意なのは水泳。

その昔、小さなサイトで連載していた物語です。
ブログでの連載であったため、1話はかなり短めです。

出会い編 第1話

出会い編

「我が商店街の人手は、年々減少し……」

私の店も入っている青空商店街。
3ヶ月に1回の会合は、いつもこんな話題で盛り下がってゆく。

昔の商店街は、人々の活気に溢れていたという。

しかし、駅裏に出来た大型ショッピングセンターに客は取られ赤字に転落。

30あった店は現在8店舗まで減ってしまい、戦後アーケードを覆った天井も長年の雨風により風化し、壊れた屋根からは青空が見え、本当の意味での青空商店街となってしまう。

「で、花屋の羽並葉子さん。

この商店街を活気あるものにするために、どうすべきか考えてきましたか？

まず、お若い店主の話から聞きましょう」

大抵発言権は、まずこの店主の会で一番若い私に来る。

しかし、毎回のように奇抜な発言をする私の案は却下されるのだ。だけど、なんとかして立て直したい一心で私は自分の思いを告げ続けている。

「この寂れた（さびれた）商店街の景観を変えることが必要だと思います。」

例えば、つぶれた店を壊し子供たちが遊ぶ公園などを建てれば、その親が集まり客も増えるかとも思うのですが、現実問題、買収するお金などありませんから……」

「それで？」

また、夢物語だと思っっているに違いない。
店主達のざわざわとした声が聞こえてきた。

「土地の持ち主に許可を得て、シャッターに専門アーティストから壁画みたいな絵を描いてもらうのはどうか……な……と」

「はい、次。魚屋の多美子さん」

やっぱり、無言で却下されてしまった。
でも、もういろんな手を尽くしたのだ。

今まで、人を寄せるためにありとあらゆることをした。

だが、何をやっても大型の駐車場を持つショッピングセンターには負けるのだ。

このままだと、商店街が消える前にうちの花屋がつぶれてしまう。

祖母の代から続く花屋、それだけはしたくなかった。

出会い編 第1話（後書き）

第2話

「それでは、八百屋の大田さんが提案された、それぞれの店の割引券を配るという案で商店街の建て直しを図りたいと思います。では、今日の会合を終わります」

また、焼け石に水のようなことをするんだ。

私はそんな事を思いながら、さっさと片づけをする店主たちの顔を見つめていた。同じ手段で何度客引きをしたか、その結果がどうだったのか、皆が知っているはずなのに。

だが、決まったら変えられない、それが商店街の掟なのだ。

仕方がない……

次回の会合に期待するしかない。

気持ちを切り替えた私は、塩崎会長の元へと歩み寄っていた。

「すみません、塩崎会長。ちょっといいですか？」

私は、会長に相談したいことがあった。

それは、ちょうど2ヶ月前から訪れるようになった
ちよつと風貌の悪い男たちのことであった。

「週1回のペースで、土地を譲れとやって来るんです。
フィットネスクラブの関係者らしいのですが、
この商店街のほとんどの土地は買収したって言うんですよ。本当に
すか？」

その話をした途端、

私、魚屋の多美子さん、塩崎会長を除く店主たちは出て行ってしまった。

不自然な彼らの行動に、なんだか嫌な予感がした。

そして、私の話を聞き終わった塩崎会長は、
魚屋の多美子さんに目配せしたのだ。

「ああ、本当だよ。残っているのは、うちと君ら3店舗だけだそう
だ。

向こうの言いなりになれば、今の地価の倍のお金が入ってくるから
ね。

皆はもう、商店街を盛り上げるなんて無駄な努力はしたくないと思
っているのだろう」

「えっ……」

確かに、相手が提示した買収金額は考えられないほどに高い値段で
あった。

だが、それは同時に、店、そして職を捨てるという選択になるのだ。

「そついうのものですか？

今まで、力を合わせてみんな頑張ってきたんですよ」

なんだか、悲しくなってきた。
5年前までは、貧乏でも商店街復活のために頑張ろうと一致団結していたのに。

「仕方がないんだよ。皆、生活がかかっているんだから。
風化するこの時代の中で、みんな何かを捨てていったんだ。
もう人情なんて死語なのかもしれないな」

死語だなんて……私は、頭が真っ白になった。

第3話

「いやあ、葉子ちゃんの入れてくれるお茶は絶品ね。
どんな高いお茶なの」

「いえ、しずさん。高いお茶なんて買えませんよ。ただの番茶です。
番茶やほうじ茶、紅茶などもそうなんですけど、
香りを楽しむお茶は熱湯で淹れた方が香りが出ていいんです」

昼間の花屋は、
買い物帰りのおばちゃんたちの溜まり場だ。

祖母の代から伝統的に受け継がれている

この一種の寄り合いみたいなものを、私はしっかり引き継いでいる。

もちろん、このおばちゃんたちが必ず花を買っていくわけではない。
でも、花を見ながら話をし、

癒されたよと言いながら満足げに帰ってゆくおばちゃんたちを見ると
どうしてもやめられなかった。

儲けはなくても、それが人情……温かさだった。

「今日は、大福もちを作ったのよ。よかったら食べて！
ほら、葉子ちゃん、みわさんも」

「うわぁ、美味しいしずさん。懐かしい味がする」

「そう？嬉しいねえ」

彼女の大福の味……なんだか、おばあちゃんの味を思い出した。

この花屋の創業者……私の祖母だが、
15年前、私が10歳のときに亡くなった。
その後は母へ代わりし、5年前から
私がこの『はなみ花屋』の看板を守っている。

父は酒癖と借金癖が悪い人で母も随分堪えていたが、
結局は、祖母が亡くなったのと同時に離婚を言い渡した。

それから母は、細腕ひとつで私を育ててくれ、
花の素敵さを教え続けてくれている。
だが、そんな母は、今末期癌に侵され病院に入院していた。

子供の頃に、たくさんの花の名前を覚えてくれた優しい祖母、
そして、厳しいながらもアレンジのノウハウを覚えてくれた母。

ふたりへの感謝のためにもこの花屋は続けなければいけないし、
出来るなら母が生きているうちに結婚して
子供が生まれれば……なんて思うのだが、
さすがに人生そう上手くはいかないようで。

「あっ、お客さんだわ。おばちゃん、お茶は適当に注いで飲んでね」

今日、はじめてである貴重なお客様が来た。

私は、いらっしやいませと大きな声を出しながら、土間の店へと降りた。だが、その後の声は出なかった。

なぜなら。

お客として現れた男性は、まるでシンデレラに出てくる王子様のような……

凄くいい男だったから……。

第4話

白馬に乗った王子様……。

誰もが出会いたい理想の男性。

私は25歳のこの歳にして、そんな人に出会えたんだと思った。

「い、いらつしゃいませ」

私は、キュンと縮まる心を落ち着かせるために
小さく息をついた。

間近に見える彼の茶色い髪が、サラサラと揺れている。

大きなバケツにぎっくりと挿した花。

その香りをかいでいる俯き加減の顔はとても凛々しくて、
瞳は彼に釘付けとなった。

「今からお見舞いに行くんだけど、適当に作ってくれるかな」

鼻筋も通りしつかりとした唇。

姿勢を戻した彼の大きくて茶色い瞳が

私の黒眼をまるで稲妻のように貫き、

顔全体が熱を持つのを感じた。

いけない、いけない仕事モードに戻さなきゃ……

心の黄色信号に気付いた私は、ようやく言葉を発した。

「女性の方ですか？」

大抵、若い男性が花屋に来るのは女性のため、恋人だ。

「ああ、高校生の妹が入院してね。

そうだな、値段は気にしないでいいから、

その淡色のピンクの薔薇を使って仕上げてくれないか

……あ、籠はよしてくれ、いかにもって感じで恥ずかしいから」

妹……。恋人でないことに安堵する。関係ないのに。

「そうですね。じゃ、淡い系のピンクと白薔薇を使って、ちよつとアクセントに

イングリッシユアイビーとスプレングレーで。

和紙で包めばいい感じですよ」

ガラスのショーケースを空けた私は、
それぞれの花や緑を出してゆく。

……この瞬間が一番好き。

その人の持つイメージに合わせ、
花を作り上げてゆくこと。

祖母や母の後姿を見て

鍛え上げられたセンスに独自の嗜好をいれ、

貰った相手の喜ぶ顔を想像してワクワクするのだ。

でも欲を言つと、

本当はこの男性に持たせたい花束が頭にちらついて仕方がなかった。

第5話

「いかがでしょうか」

私は、花の種類がよく見えるように、
彼の手に花束を渡した。

「へえ、もっと派手なりボンで結ばれると思ったけど、
紐で結うというのもお洒落だね」

彼は、いかにも花束というのが嫌いなようだ。
そんな趣味の男性に、特大ピンクのリボンなんてつけようものなら、
品がないと言われるのは目に見えている。

そういう人のために、手芸屋でヒントを貰った
紐結びという技術をとりにいれて、作り置きをしていた。
彼の表情からして、十分にインパクトあるものになっていると思う。

「そう思って、手芸などで使われる紐結びであしらってみました。
紐自体は特殊なものを使っているので、
高級感は十分に出ていると思います。
ちなみに、これは四葉のクローバーをモチーフにしています」

男性は、薄い緑の紐で編みこんだ紐結びをまじまじと見ながら、
『幸せの四葉だね』と言って笑ってくれた。

目を細めたその笑みも物凄くよくて、卒倒してしまいそう。
ほんの短い時間で、恋に落ちてしまった事実を
実感せずにはおれなかった。

「はい、妹さんが元気になられますよう思いを込めています」

「ありがとう。いくらかな」

「税込みで6000円です」

「それでいいの？花束にしては大きくて結構いいもの使っているような気がするけど」

さすがにお目が高い。だから儲からないのだ。人情商売は、営利を目的としないからこんな結果となる。でも、おばあちゃんの遺言だから続けるのみ。

「はい、よろしければまたいらしてください」

とびっきりの笑顔を見せて、私は大丈夫だとアピールした。

「ありがとうございました」

私は、花屋から出て行く彼の広い背中を見つめる。まるで、爽やかな風が抜けるように、男性は商店街を後にした。

「おばちゃん、今の人凄くかつこよかった！」

興奮して乱れる息を整えながら、私は土間から戻った。そこには呆れて顔を見合わせるおばちゃんたちがいて。

「また見てるだけかい、葉子ちゃん。」

もうこの商店街は、寂れる一方だ。

こんなところに居続けても結婚はできないよ。

店を守るのもいいけど、自分の幸せを掴みそこなわないようにね」

しずさんが、心配そうに呟いた。

「何言ってるの、おばちゃん！まだ私25よ」

「もう25じゃない。うちの娘は23だけど、子供が生まれるよ。ぼっとしてるとあっという間に三十路。お母さんだって孫の顔見たいって言うでしょう？」

もう25……？

自分としては、まだまだ若いつもり。

三十路過ぎたって今の世間からは遅いとは言われないのだ。

……だけど、お母さんだってと言われると心が痛む。

5年ほど前は、この商店街もほんの少しの活気が残っていて、今はもうない2件先のケーキ屋の息子と恋に落ちたりもした。

だが、その後はこんな感じだ。

今日のような若い男性に会ったのも何年ぶりだろうか。

「そうね……。私、いつになったら恋人出来るんだろうね。おばちゃん」

食べかけていた大きな大福もちをほおばる。

ちよっと甘過ぎるその大福は、私を切ない気分にした。

第6話

「おはようございます!」

駅が近くということもあり、通勤客の通りが多いこの朝の時間帯。

花屋の開店準備と掃除をしながら、

私は行き交う人に挨拶するのが日課となっていた。

最初は知らぬ振りをしていたサラリーマンの数人も、

最近になってようやく返事を返してきてくれるようになる。

結構、この変化も嬉しいことであった。

「おはよう」

私は、後ろより声をかけられドキッとした。
その声には聞き覚えがあつて。

「あ、お、おはようございます」

それは、1週間前に妹への花束を注文してくれたあの男性。

この間はジーンズでラフな格好であつたが、
今日の着こなしは、黒いスーツで
『仕事の出来る男』という感じ。

スタイリング剤でセットしているためか、
形のいい額と眉が露になつていて、
大人びた色気を感じる姿だ。

彼は、檜とラベンダーの入ったフレグランスを
つけているようで。
いい香りをふわりと残しながら
開店準備でわんさかと散らばる店内に入り、
くるりと店の中を見回した。

「この間の花束だけど、妹が凄く喜んでた」

「ほ、本当ですか！嬉しいです」

「だからと言うわけじゃないけど、今日も作ってくれないか」

彼は、開店前にごめんと言いながら、
会社の受付に飾る花が欲しいと言った。
花は、君に任せるとのこと。

やったー！彼のために花束が作れる。

あれから、彼の姿とイメージする花束が浮かんで
仕方がなかったのだ。

既に頭の中には、彼に似合う花の名前がぞくぞくと湧き出ていた。

「構いませんよ。中の椅子でお待ちくださいね」

私は、にやける顔を隠すように、
彼に背中を向けると包装紙を選び出す。

そして、ガラスケースから
ケイトウ、トクサ、ドラセナ、アンズリユーム、
菊、ひまわり、鉄砲百合などちょっとシックで大人向きな花を選び

出した。

濃いブラウンを貴重とした包装にし、
リボンは今回も紐組みを使う。

「いかがでしょうか。お客さまのイメージに合いますか？」

私が持つ彼のイメージだけで作ってしまった。

彼が花束を持ったときに、

彼のかっこよさが引き立つようにアレンジしたのだ。

きつとこれを持った彼は、多くの女性から振り向かれることだろう。

「へえ、僕は結構いいイメージなんだな」

「お褒めいただきありがとうございます」

「君、もつたいないよ。」

こんな寂れた場所の花屋の店主にしておくのは

「えっ？」

「じゃ、急いでるから行くよ」

もったいないよ。

彼は、その理由に触れることなく
お金を払い帰ってしまった。

でも、嬉しかった。

片思いの男性をモチーフに、花をアレンジできたことが。

第7話

あれから

あのかつこいい彼は、
毎週のようにうちに来ては、花を買っていくようになった。
それ以外も時々顔を見せては、
声をかけたり掃除を手伝ってくれて……。

もしかしたら、手ごたえあり!？
なんて勘違いしそうなくらい、
私達はいい雰囲気であった。

「いいなあ、そんないい男が
どうして葉子のところに入り浸るわけ。
隣のしずさんから聞いてびっくりしたわよ」

……と、ひどいことを言うこの友人。

魚屋の多美子さんの長女、詩織だ。

彼女は生臭いのが嫌い、魚屋を毛嫌いし、普通のOL生活を送っている。

「入り浸っているわけじゃないわよ。

彼は、私のお花のセンスを認めてくれてるだけ」

「きゃあ、彼だつて！」

詩織は、『今日は、おはぎね……いただきます！』

そう呟きながら、手を伸ばしおはぎをほおばる。

おいしそうにもぐもぐと食べたあと、言った。

「でも、気をつけなさいね。

うちの店には最近、土地買収の件で

FIEの副社長と名乗る人が交渉に来ているみたいよ。

かあさん曰く、とうさんの若い頃のような

美男子が来てるって」

「えっ？とうさん」

おじさんの若い頃の写真。

幾度か見せられたことはあるけど、

それほどの美男子だとは……。

「まあ、遠い昔の思い出みたいだから
深いことは気にしないで」

「うん、そ、そうね」

それはともかく。

FIEというのは、最近アメリカへの進出が噂される
大手フィットネススクラブの会社名だ。

第1回の説明会に行った塩崎の話では、
商店街の土地を買収し、
会員制の大型フィットネススクラブを造る予定だという。

そう、一時期来ていた強面の男性らと同じ会社。
とうとう副社長のお出ましというわけだ。

「まあ、副社長が来ても売れないものは売れないの。
無駄足よ」

「そうかなあ、
かあさんのところに置いていった資料見せてもらったけど、
こんな土地が結構いい値で売れるんでしょう？
悪い提案ではないようにみえたけど」

確かに一見美味しそうな話だが、
土地を明け渡すということは無職になることを意味していた。
そのための上乗せ料金なのだ。

花屋が出来なくなるなんて絶対駄目。
ムキになった私は、詩織を叱り飛ばしてしまった。

「いくら売れない花屋だって、
何十年もの歴史が刻まれているんだから！」

「ごめんごめん、
病気のおかあさんのためにも
潰しちゃいけないだよな。
あ、ほらお客さんだよ、行ってきな」

「あ、……ごめん、詩織」

詩織を怒っても仕方がないことであつた。

いつの時代にも繁栄と衰退の時期がある。

たまたま、そういう氷河期に私は継いでしまったのだ。

あとは、いつか巡り来る繁栄に向かつて

今行つべきことを細々とやっていくしかなかった。

私は、深呼吸をして気合を入れる。

「いらっしやい……。あつ、真純ますみさん！」

店に立っていたのは、

ようやく名前を聞き出すことに成功したあのイケメン男性であつた。

第8話

店に立っていたのは、
ようやく名前を聞き出すことに成功した
あのイケ面男性。

それは、前回店に来たときのこと。

彼の名を知るため用意していた台詞を、
清水の舞台から飛び降りる覚悟で伝えたのだ。

『いつもお客様と呼んでるばかりで、堅苦しいような気がして……』

と、花束を作りながら私はそう理由付けし、
彼の名前を聞いてみた。

引かれるかとも思ったが、

彼はその深い理由に気付くことなく教えてくれた。

『僕の名前……？真純ますみって言うんだ。

真実のしんに、純粹のじゅん……。君は？』

『わ、私ですか？羽並はなみと言います！！羽毛のうに、牛井の並です』

『牛井…並か。それはいい』

一番分かりやすい説明のつもりであったが、
どうも笑いのツボに入ったらしく、
彼は胸を押さえながら笑っていた。

くしゃっと崩した笑いがまた人懐っこい感じ、
確かに普通の自己紹介で使う言葉じゃないなと思うと
つられて笑ってしまった。

本当は、下の名前まで聞く予定だったけど、
結局のこの騒動で聞きそびれてしまう。

真純って言うとなんだか名前みたい。

でも、彼の雰囲気が一番合った苗字だと思った。

『いらっしゃい……真純さん……』

耳元でまだ、自分の言葉の余韻が聞こえる。
初めて口に出した彼の名の響きに、
私はうつとりと酔いしれた。

「あれ、どうしたの？なんだが、今日は冴えない顔しているね」

まるで、さっきまでの詩織とのやり取りを
聞かれていたかのように、
私の心の塞ぎを見透かしている彼がいた。
それでようやく我に返った。

「いいえ。今日も元気ですよー!!」

精一杯の笑顔を作り、心を仕事モードに切り替える。
そうでもない彼の優しさに甘えて、

身の上話でもしそうな気持ちになっていた。

「今日は、花束ですね」

彼が朝早く来店するときは、会社用の花束。行動パターンはもう熟知済み。

「ああ、今日は社の女の子の送別会だから、女性仕様で頼む。どんなのがいいか良く分からないから、全て任せるよ」

「かしこまりました」

最後のお別れ。

彼から貰うのならば、

退職を後悔するくらいに感動する花束。

紅い薔薇をモチーフにしたアレンジがいいと思った。

今日の夕方から明日にかけて綺麗に咲く薔薇を中心に選び取ってゆく。

その時、右手人差し指に鋭い痛みが走った。

「いたっ!」

取り尽していなかった棘が刺さったのだ。

みるみる指先から赤い血が滲んでゆく。

私はティッシュで赤く流れる血液を拭き取ると、

近くにあったビニールテープで指をぐるぐる巻きにした。

乱暴なやり方だけど、絆創膏を探す暇はない。

このくらいのことです、お客を待たせるわけにはいかなかった。

だが……。

「君、何やっているんだ！雑菌が入ったらどうするんだ」

彼は、そんな荒治療に驚いたようだ。

キッと睨みつけるように見下ろした彼は、

私の手を掴み上げ、ぐるぐる巻きにしたビニールテープを外す。

そして、再び滲み出てきた血に吸い付くように、

彼は私の指を口にくわえたのだ。

それは、一瞬の出来事であった。

第9話

それは、一瞬の出来事。

だけど、時計の針が止まっているかのように
ゆっくりとした時間に思えた。

目を閉じた彼の顔がすぐそばにあった。

私の指は、人肌よりちよつと温かくて……。

フレグランスの香りが心地よく鼻腔を擦る。

世界でただひとりのお姫様のように、幸せな気分だった。

私は、伝えたくなつた。

私、真純さんのことが好きなんです

……と。

「あんだ！うちの葉子にちょっとかい出すんじゃないわよ！！」

まるで霞がかかったかのようなほんわりとした空気は
魚屋の多美子の囁れ声でサッと消えてしまった。
店の前に立ちほだかる多美子は、顔面蒼白で彼を見つめている。
彼女の声と同時に、温かかった指がスツと寒くなるのを感じた。

「FIEのトップがなにやってんの！

あんだ、葉子を誘惑して土地を騙し取るつもりでしょう！」

彼女は、真純のことをFIEの人と思い込んでいるよう。
早く訂正してあげなければ彼が可哀想だった。

「お……おばさん？な、何言ってるの？それは違うわ」

「あんだこそ、何言ってるの！」

多美子の気迫に押され、言い出そうとする言葉が出ない。
彼女のこの確信はどこから来るのだろう。

幸せな気分から一変、地獄に突き落とされたみたいに
私の口元はブルブルと震えている。

FIEって…あの。

でも彼の苗字は、
資料に書いてあったFIE社長の恩田おんだじゃなく、
真純なのだ。

「おばちゃん、彼の名前はね」

ようやく言葉が出た。

だけども美子はその言葉すら耳に入らないようで、
店の中につかつかと入ってきたかと思うと、
テーブルをバンと叩き真純を睨みつけたのだ。

「葉子も馬鹿だよ！見栄えのいい男に
現を抜かしたりしてるからころりと騙されるんだ。その男はね」

おんたますみ 株式会社FIEフィットネスクラブスポーツ副社長
恩田真純なんだよ！

はっきりとそう聞こえた。

「おんだ……ます……み？」

彼から掴まれていた手が、ふと離れてハツとする。
それは、彼の正体が多美子の指摘どおりである事を表していた。

第10話

彼から掴まれていた手が、
ふと離れてハツとした。

それは、彼の正体が
多美子の指摘どおりである事を表していた。

「あたしは今、この男から
土地の買収を持ちかけられているんだよ！」

ああ、そうだ。
おばちゃんは、既に彼との面識があつたんだ。
私は愕然とする。

今までの事、全てが夢物語だったんだと。

「あたしはね、葉子の親から頼まれてんだ。

分かったらとつとと帰りな！」

多美子は、それを捨て台詞に踵を返す。

真純は、店を出る彼女に深々と頭を垂れた。

嵐が去ったあとのように、店は静かになった。

いつもなら、商店街からいろんな音が聞こえてくるのに全く聞こえない。

それがショックから来るものだと分かるのに、ちよっぴり時間がかかった。

彼とふたりになっても、まだ口が震えていた。

だけど、現実を突きつけられても、

どこかでまだ彼の事を信じている馬鹿な私がいて……。

「ま……すみさん、おばさんの言ったこと本当ですか？」

違うよ……

そんなありえない答えを想像しながら、
柔らかな表情で私を見下ろしている彼の顔を見上げた。

「ああ、間違いない」

深いため息をついた真純は、
内ポケットより名刺を取り出して差し出す。
と同時に、柔らかかった彼の表情が
スツと消えてゆくのが分かった。

「改めまして、FIE副社長の恩田真純です。

僕は、この土地の買収のために来ました。

先日は、父が人相の悪い従業員を

こちらにお邪魔させたようで申し訳ない。

これからの交渉は、全て僕が行う事になりましたので……お手柔ら
かに」

やっぱり、彼の仕組んだ罠だった。

足の力が抜けてゆくのが感じた。

全ては、土地を得るため。
私のセンスなど、初めから分かってもらえていなかった
ということなのか。

「真純さん……いえ、副社長。
うちの花を買っていただいていたのは」

『君のアレンジが気に入ったからだよ』
ここまできても、そう言ってほしいと願う自分がいた。

「敵内偵察のため。そう言った方が戦いがいがありますか？」

真純は、瞳を冷たく細めた。

「て、き？」

「あなた、なに言ってるの。
葉子はね。あなたのこと本当に信頼して」

いつの間にか後ろに立った詩織が加勢してくれる。
私は、現実を知りようやく目が覚めた。

彼が名を真純と名乗ったのも、
怪我を心配してくれたのも、全ては土地のためなのだ。

打ちひしがれているばかりじゃいけなかった。
強くならなければならなかった。
溢れそうになる涙を堪え、私は大きく息を吸った。

「俄然やる気が出てきました。私は花屋を続けます。
娯楽施設のようなあなたのスポーツクラブなんか
負けたりしませんから。お、ん、だ、副社長」

私は、わざと彼の苗字を強く言った。
敵を意識し戦うためであった。

彼の瞳に動揺が走るのが分かる。
彼の変化に、胸が痛くなるお人よしの自分に嫌気が差した。

「だけど、仕事は仕事ですので花束は作ります。
ちょっと待っててください！」

威勢良く言ったものの、凄く泣きたい気分だ。
偵察のための花束作り、
淡い恋心を打ち碎かれたその心で
一体何を作れというのだろうか……。

私は、震える指で包装紙を取り出すと呼吸を整えた。

第11話

あんな男のために、
花束なんか作らなくてもいいじゃない。

詩織は、そう言いながら仕事に行ってしまった。

確かに、彼の目的を知ってしまったのに、
花なんてアレンジする必要もない。
彼が今まで必要としてきた花束たちも、
本当に飾られたのかさえ怪しいものだ。

だけど、花束を作るのは副社長のためじゃなく、
花屋のプライドのためと言い聞かせることにした。

彼は、今何をしているのだろうか？

やけに背後が静かで、

はさみで茎を切り落とす音だけが店内に響いていた。

もしかして帰ったんじゃないかと心配になった私は、
アレンジの手を止めると、
はさみを戻す振りをして彼の姿を視界の隅に入れてみる。

真純は、店の中にある丸椅子に座り

……じっとこちらを見ているように思えた。

もう少しだけ。

……自分の体を彼の方向に向けると、

恩田真純の全体像が見えてくる。

彼は丸椅子に座ったまま、腕を組み壁に寄りかかっていた。

寝てる？いや違う……。

茶色い髪は、彼の目元を隠していた。
スツと通った鼻は、まるで異国の人のように綺麗な稜線を描いている。

身体には合わない小さな丸椅子に、
バランスが取り難そうな長い脚は品よく組み立てて……、
何度見ても完璧な姿。

だけど、なんだか彼の姿には違和感があった。

それは口元だった。

キュツと真一文字に結んだ唇。
休息をとっているはずなのに、緊張が抜けきれていないのだ。

唇だけが彼の精神を映し出している。

きつと、仕事中の彼は、

四六時中こうして気を張って生活しているのだろう。

今作っている花束は、

彼に向けてのメッセージであるけれど、

彼が見て心が休まるような花束にしたい……そう思った。

彼から騙されているとわかってても、
それでも彼を想い花をアレンジしたい…それが本音だった。

私の視線を、彼は感じたのかもしれない。

真純は、ゆっくりと瞳をあける。

茶色いビー玉のような瞳がこちらに向けられると、
眩しさで細めた私の視線と絡まった。

「もう、出来た？」

ドキン……。

心臓が跳ねた。

私は彼から急いで視線を外すと、
淡いピンクの紐組みを花束に巻きつける。

「出来上がりました。」

今日は小さい花束ですので、ご自身のデスクにでも飾ってください」

それは、桜草とかすみ草で作った花束だった。

その花を椅子から立ち上がった彼の胸に押し付けると、くるりと背を向ける。

「かすみ草の花言葉は、切なる喜び、親切。

私の店に対する思いです。

そして、桜草は、若い時代の悲しみ……そして、勝利です。

御代はいりません」

その花束に、こっそり癒しの細工を入れたことは隠したままにする。

私たちの間に、しばしの沈黙が訪れた。

この沈黙はなんなのだろうか、
彼自身の罪悪感の表れだったら、
まだ救われるかもしれないと思った。

私の気持ちを弄び踏み滲んだこと、少しは後悔して欲しい。
だが、彼が返した言葉は。

「ありがとう、早速僕のデスクに飾らせてもらおうよ。でも、勝利者は僕だ。挑戦的になればなるほど、手中に落ちてゆく君の姿が見えるようだよ。これからもよろしく。葉子さん」

「な…！」

彼は私の背中にそっくり残したのだ。

その言葉はゲーム感覚にしか取れなかった。

敵呼ばわりといい、

どうして彼はこんな言い方しか出来ないのだろうか。

「落ちたりなんかしない。ふざけないで…！」

私はくるりと向きを変えると、

消え行く彼の背中に大きな声を上げていた。

私は何も考えたくなくて、ゴミを捨て始めていた。
切り取られた葉や茎がバサッバサッと音を立てながら、
ゴミ袋を入れたダンボールへと入ってゆく。

すると、はさみとテーブルの間に
差し込むようにお金が置かれているのを見つけた。
それは千円札で、真純が置いていったものだとすぐにわかった。

「これは、もしかして……」

紛れもなく花代として置かれたものだった。
私は、そのお金を絆創膏を貼った指先でバラバラにする。
そして、3枚だったその札に指の動きを止めた。

「3千円？」

本来ならば私が彼に伝えるはずの花束代、

真純はその値段きつちりと置いていったのだ。

それは偶然の代物ではなかった。

パツと見た素人が花の値段なんて分かるはずもないから。

「真純さん、あなたは一体……」

彼は、ただ単に土地ばかりを見ていたのではなかった。

今までの私のアレンジを見ていて、この値段をはじめ出したのだ。

彼は、自分の技を見ていてくれた……

そう思うと、身体に通っていた突っ張りが

外れてしまったように思えた。

「どうして、彼が敵なのよ……」

今まで我慢していた気持ちが溢れ出てきた。

好きで好きで仕方がない人が敵だなんて

あまりにも惨すぎることであった。

第12話

「ああっ!!」

私の手から離れたドライバーは、
脚立の角に当たり大きな金属音を立てながら
土間に転がってゆく。

午後の昼下がり、一番嫌いな日曜大工。
シャッターの締りが悪くて見ているんだけど、
全然理由が分からない。

そんな、四苦八苦している私に声をかけた人がいた。

「今日は、計画書を変更したから届けに来たよ。
悪くない提案になったから目を通して。」

それと、何か困ったことは……あーあるようだね」

落ちたドライバーを拾い上げたのは、

ＦＩＥ副社長、恩田真純。

あれからも、彼はちよくちよく顔を覗かせていた。

こうやって、買収した跡地の開発計画書を持ってきては、目を通してと置いてゆく。

特別土地を手放すようせつつくこともせず、花束を買ったり、こうやって困ったことがないかと言葉をかけてくるのだ。

一見親切そうだが、OLの詩織から言わせると

『彼、営業のノウハウも知っているのね』ということらしい。

「いえ、なあ〜んにもありません」

「大変そうじゃないか。ちょっと、僕に見せて」

「いいですって……あっ……！」

彼と押し問答の末に、脚立の上でバランスを崩した私は、声にならない悲鳴を上げてしまった。

手が離れぐらりと揺れたかと思うと、脇に大きい手が添えられる。それが真純の手だということに気付くと、私は息を呑んでしまった。

彼の顔がすぐそばにある。

呼吸さえも聞こえてきそうなその距離に、

身体全体が火照った。

「女性がそんな事をしていると、危なっかしくてたまらなくなる。ちょっと退いてもらおうよ」

その言葉とともに、

突然、身体がふわりと宙を舞った。

彼が脇に入れた手を使い、私を抱き上げたのだ。

あまりに突然のことに、バタついて拒否することすら忘れていた。

私は、まるで小さな子犬のように場所を移動させられた。

第13話

「はい、ドライバー。」

……オイルひくからスプレー缶を取ってくれ」

脚立に上って作業している真純は、私を助手のように扱っていた。

さつきふわりと抱え上げられた彼の手の感触が、胸に程近い脇にまだ残っている。

それに加え、彼の指示した物を渡すたび、彼の手に触れてドキドキが増していった。

はつきり言って、心臓にも精神的にもよくない状況だった。

でも、男性がいると

こんなことも簡単にしてくれて頼もしいなとも思う。

私の父は、物心ついた頃から父親らしいことなど
してくれていなかったから、男性の頼もしさをはじめて感じていた。

「はい、終了。年に一度はオイルアップが必要だよ」

真純は、脚立より降りシャッターを開けると
埃まみれになったスーツをパタパタとはたきながら
スプレー缶を私に渡した。

「随分、古い家だな。確か、戦前に建てられているんだよね。
隣町は空襲で焼けたみたいだけど、ここはほとんど残っていたんだ。
すごいよな」

土地を買収するにあたり、
彼はこの土地について調べていたのだろう。
真純は近くにあった柱を軽く叩きながら、呟いた。

「ええ、ここに店を建てて1年後に戦争が始まったって聞いてるわ。戦火にも負けなかった店、ところどころはボロがきてるけどまだまだ十分に使える店よ」

「確かにね」

真純は、特に言い返すこともせず、相槌をうつてくれる。敵味方など忘れてしまいそんな平和な会話に気分がよくなった。

「私はね。小学生の頃は、その丸椅子に座っておばあちゃんから花の名前を教わっていたの。中学生の頃は、花言葉を覚えていたわ」

ちなみに…

そう前置きして、私は真純の誕生日を聞いた。

話の流れでなんとなくのつもりだったが、よくよく考えてみるとすごく積極的なことのようにも思えて。だが、彼は穏やかな表情のまま答えてくれた。

「僕は、クリスマス生まれ12月25日で25歳になるんだ」

「25？」

あと2ヶ月ほどで誕生日だ。
誕生日は私のほうが早いけど彼と同級生となる。
なんだか嬉しくなった。

「12月25日は、ポインセチア。
花言葉は『私の心は燃えている』よ」

「へえ、すごい」

真純は大きな瞳をいっぱいに開き、
屈託のない笑みを見せた。

まるで、プレゼントを開いた子供のように、
感動と嬉しさの混じった表情。

いろんな表情を見せる彼の中で、一番愛嬌のある顔に違いない。

「じゃ、君は？365日全部知ってるのか？」

「さすがに全部は覚えられなかったわ。
だから、特別な日だけ覚えたの。」

で、私は4月13日で25歳になった。花言葉はね……」

そこまで言いかけて、はたと言葉が止まった。

実は、私の花言葉は『あなたを愛します』である。
女同士だったらバカみたいに笑って終わりだけど
さすがに好きな人を目の前にして言える言葉ではない。
これじゃ、愛の宣誓だ。

「さあ、なんだったかしら？」

しらばつくれることにしたかったが、
ここまで言っただけが納得できるはずもなく。

「なんだよ。僕だけ聞いて、君は教えないうって言うのか」

やっぱりそうきた……。

自分で墓穴を掘ってしまったって自業自得だと思っただけだった。

「私の花言葉は……」

相変わらず、興味深げな彼の視線が飛び込んでくる。
避けられそうもない彼の視線を受けながら私は言った。

「あなたを愛します……」

目の前の真純の表情が一瞬止まったような気がした。
やっぱり引かれてる。
最悪。

「……どうい言葉よ」

あえて花言葉を強調した。

同時に、『軽くかわしてよ』と心の中で叫んでいた。その心を知ってか、彼は表情を柔和に崩す。

「驚いた。本当に告白されたかと思ったよ」

冗談で流してくれた彼の言葉にホツとしながらも、異性として試してもらえない空しさも味わうこととなった。

「ば、馬鹿ね。花言葉って言ったじゃないの」

私は、紅くなる頬を隠すために踵を返し、
工具を元に戻すため店の奥へと入っていった。

「脚立は、外でいいんだよね」

「ありがとうございます」

真純は、パンパンと手を叩きながら店へ戻ってくる。
だが彼は、店の前で足を止めると、店の中と外をくりりと見回した。

「本当にもつたいないんだよ」

えっ？

主語のない突然の彼の言葉に、私は不思議そうな顔をする。

「このお昼の時間。」

破れたアーケードから光が入って来る事は知ってるよね。
だけど、見て。僕はもう40分ほどこの店にいるのに、
自然光が入らないんだ。

店の造りも古びて暗いし、せつかくの花の色がくすんでいる。
確かに花束を渡すときってほとんど室内が多いから、

蛍光灯の光だけでも十分に色は掴めるんだけど……。
僕はね、店に自然光を取り入れたもつと雰囲気のある店に
したらいいと思う。君の腕もなかなかのものだし、
このままでは、商店街とともに自滅の道を歩むことになると思うよ

何を言い出し始めると思ったら、またそんなこと。

いいこと言っただけで追い出そうという魂胆なのだろうか。

詩織の言うとおり営業が始まったというのか。

店を立て替える予算なんてないこと、

貸してくれる銀行もないこと、

店を見たら分かるでしょう？

「手伝ってもらったからって、

買収の話に乗るなんてことしないわよ」

真純は、呆れたようにため息をつく。

「そんな考えはないさ。でも君、頑固な人だな。これ以上美味しい話はないと思うんだけど」

彼は、そういうと踵を返し店を出て行った。

「やっぱり、営業か……」

甘いマスクに取り込まれそうになっていた自分に活を入れた。私は、心の中で彼にあっかんべーをするとテーブルに置かれた資料をゴミ箱に捨てた。

第14話

「おかあさん。今日はね、しずさんからお赤飯を貰ったのよ。ご飯は、こっちを食べて」

5年前に検診で癌が見つかり手術を受けた母。
1年前に再発したときには、すでに骨にまで転移していた。
商店街の建て直しに夢中だった私たちは
互いの健康のことなど頭になかったのだ。

きつと母は、痛みを堪えながら仕事をしていたに違いない。
そんな母のことを気付いてやれなかったこと、後悔ばかりが先に立

っ。

その後悔を詫びるように、
私は歩けなくなってしまった母の看病に全力を注いでいた。

「しずさんの娘さん、孫さんが生まれたのね」

「う、うん……女の赤ちゃんで、

2週間早かったんだって、とても元気よ」

「そう、可愛かったでしょう？」

「うん」

あまり、こういう話題には触れたくなくて口を噤んでしまっ
……それは、なぜか。

「私もね。あなたの赤ちゃん抱きたかった」

そう、この過去形の言葉が胸に痛いのだ。
花屋は、頑張れば続けていくことが出来る。
だが、赤ちゃんばかりはひとりで頑張っても授かるはずもなく。

「何言ってるのよ。抱けるわよいつか」

「いつかっていつよ？」

「う、分かりません……」

私のその場しのぎの返事に、

母は痛い体を庇いながらクスクスと笑った。

「葉子……でもね、幸せを掴むためにも、

もう花屋の看板は守らなくてもいいと思うの」

「え？」

突然の母の言葉に、私は言葉が出なかった。

癌が再発するまでは、

そんなこと口に出す人じゃなかったのに。

目の前にいる、痩せた母の背から射し込む光が、

まるで白いオーラのように見えてきて、私はゾクリとした。

「あの商店街にいても、近いうち花屋は潰れるわ。土地を売れば、あなたひとりぐらいだったら細々と暮らして行ける位のお金は出来る。花屋のバイトをしながらいい人を見つけて、幸せになりなさい。私は、ちよつと後悔しているわ。高校出てから、すぐにあの花屋に入れたこと。大学に行つて、ある程度の学歴をつけさえしていたら、もっと広い世の中に出てあなたの人生も変わっていたかもしれない」

その言葉に、

喉の奥に綿が詰まったような苦しさに襲われた。

母は私に対し、

ずっとこんな後ろめたい気持ちでいたんだと。

母は馬鹿だと思つた……私は。

この間の花束だけど、妹が凄く喜んでた。

彼の言葉を思い出す。

辛くても、それ以上の喜びがある仕事なのだ。

「私は、こんな素敵な技術をつけてくれたこと

感謝しているわよ！大学に行かなかったのは、頭が悪かったから。ただそれだけ：親なのにそんなことも知らなかったの」

感動する場面なのに、母は相変わらずクスクス笑っている。

「そう、学年トップだったような気がするけど」

「行きたかった大学は、あの成績じゃだめだったの」

「そう、分かりましたお姫様。

そういうことにしておいてあげるわ。ありがとう。孝行娘」

「当たり前のことよ、ありがとうなんか言わないで！」

怒った振りをして、プイツと横を向いた。

涙がじわりと浮かんだからだ。
こんなことぐらいで涙なんか出せなかった。
溢れそうになる涙を背中で隠した私は、
ちよつとトイレと言いながら病室を出て行った。

来年の桜の花は見れないと思っていてください。

それは、昨日医師から告げられた母の命の時間だった。

さすがに、ショックが大きくて

その後、母の病室にも行かず病院を飛び出した。

枕を涙で濡らし、夜中一睡もせずに出した答えは、
母の店を守りながら涙を見せず、
最後までワイワイ言い合える親子を貫き通す覚悟。

なのに、急にあんなことを言われたら、
そんな意思も崩れちゃう……。

病院でも死角になる5階と6階の階段踊り場。

泣くには都合のいい場所だけど、
初冬の空気はとても寒々しく、私の頬を冷たく切りつけていた。

第15話

「あれ？葉子さんじゃないか」

階段の下から聞こえた耳慣れた声にぎくりとした私は、
急いで涙を拭いた。

5階の階段からは、
恩田真純が軽い足取りで段を上がってくる。

「な、なんで副社長がこんなところにいるの？
今度は、病院をのつとる計画でもあり？」

どうしても、この顔を見るとひねくれた言葉が出てきてしまう。

そんなひねくれの私とは違い

真純は、ちよつと息を弾ませながら踊り場まで上ってくると、嬉しそうに微笑んだ。

「のつとるか、随分嫌われたものだな」

この人懐っこい笑みに、私は弱い。

自信ありげな態度の中で、

時々こつやつて漏らすこの笑みに心がぐいぐいと惹かれるのだ。

人を陥れようとする悪い男なのに、嫌いなれないのも辛いものであった。

「この上に妹が入院しているんだ。

ほら、君から花束を作ってもらった」

もちろん、覚えている。

あの言葉が今の私の活力となっているのだ。

実は、その出来事も私に花束を作らせる嘘かもしれないと思っていたが、彼の本当の言葉だと分かり嬉しくなった。

「もちろん覚えてるわ。お加減はどう?」

「お陰様で、明日退院だ」

彼の妹、真実^{まみ}は、

喘息の酷い発作で入院していたらしい。

私を作ったあの花束をとても気に入ったらしく、

葉子さんから組組みを習うんだと言い張ってるんだという。

「君さえよければ妹に会ってくれないか?彼女も喜ぶよ」

「えっ」

「『幸せの四葉』、入院が短くなったのも
きっとそれのお陰だと信じているよ。

いろいろあって、今までうまく言えなかったんだけど……。

ありがとう、葉子さん……」

「……感謝してる」

彼は優しげに微笑むと、

私の頭を掌でポンポンと叩いた。

掌の温かさど、

彼の柔らかく見下ろされる視線が凄く心地よくて、
体の中にポツと行灯あんどんを点けられたような感覚に陥った。

やっぱり好き、どうしても好き、大好きなんだ。

そうは言えないけど、
この敵を私は愛している。

「あなたは嫌いだけど、妹さんは好きだわ。
ちよっと待って、母に言ってくるから」

私は、彼にそう告げ
踵を返すと病棟へと向かうため階段を上り始める。

どうしても素直になれない己の立場に、
胸を痛めながら……。

第16話

「ちょっと、ついて来ないですよ！」

「お母さんへのご挨拶に……。お世話になっているだろう」

「世話なんてしてないわよ。あなたはただの加害者でしょ」

「僕は犯罪者か」

母がこの病院にいと知った真純は、

病室へ向かう私の後をついてきた。

この男は母に会ってなんと云うつもりなんだろう。

『娘さんの土地を僕に下さい!』

FIEの副社長として、言わなくてもいいことを言っ
て母の肝を縮める魂胆に違いない。
だから、何が何でも会わせられないのだ。

「絶対駄目よ!ここにいて!」

私は病室の前にたどり着くと立ち止まり、
彼の目の前に人差し指を立てゆらゆらと揺らした。

「もし入ってきたら、あなたに棘付の薔薇の茎を
贈ってやるから!これ以上足を進めないで」

「でもね。葉子さん」

だけど、真純は私の怒りをよそに苦笑する。病室前に掲げる名前札を指でさした後、それはゆっくりと病室の扉へ移動した。

「ここが病室でしょ？ドア全開なんだけど。あっ、おかあさんですよ？こんにちは」

「え？おかあさん？」

振り向くと真純の言うとおりドアは全開で、ニコニコと笑う看護師が立っていた。

その奥にはびっくりした表情の母が、箸を持ったまま静止している。

「羽並さん、娘さんがかつこいい彼を連れてきましたよ。よかったですねえ！」

空気を読めない看護師の大喜びする声だけが、空しく廊下に響いた。

ああ、神さま。

こうなるのだったら、最初から土地買収のことを彼に口止めしていればよかったと後悔する。

私は、暢気に笑う真純の顔を睨みつけていた。

「葉子さんと、とても親しくしてもらっています。恩田真純です」

母のベッドサイドに立った彼は、名刺を渡すとそう言った。

もちろん母は、買収の話なんか全く知らないわけだからFIEだと聞いてもピンと来ないはず。

それどころか思いもよらぬイケメン訪問者に、頬を赤らめ乙女になっている。

一方の私は掌に変な汗をかき、ドキドキが止まらなかった。いつ彼が、『娘さんの…』と言い始めるのが心配で。

しかし、彼はその話には触れず花の話をする。
母の花好きを上手く引き出すように、
私がつった花束の話をしてくれたのだ。

「まあ、妹さんが。私のことのように嬉しいわ」

母は身を竦め、くすくすと笑った。
まるで自分が褒められているように、夢見ている表情で。

「でも、花屋って因果な商売なんですよ。
娘もそうでしょうが、作るばかりで
貰ったことなど一度もないんです」

「あ、そうなんですか？それは驚きだな」

確かに、母も私も作るばかりで
花束を貰ったことなんて一度もなかった。
彼女は私の名前を出してそう言っているが、
本当は母自身の願望なのだと思うた。

「よかったら、いつか娘にプレゼントしてやってください」

「分かりました。でも僕は、葉子さんに嫌われているから受け取ってもらえるかどうか……」

「ええ、何の毒が入っているか分からない花束なんて受け取れるものですか」

真純は、母と顔を見合わせながら

『ねっ、おかあさん。言ったとおりでしょう』
と言い笑い合っている。

母は凄く楽しそうだった。

まるで病気だなんて嘘だったかのようになり、
声には張りが出て健康的な肌色に戻っている。

こんな生き生きとした母の表情を

見せてくれた彼には、すごく感謝。

副社長を彼氏と勘違いされて困ってしまったが、
今は母のため、彼の正体を隠したまま
幸せな気分にならせておいてもいいかなと思った。

第17話

私たちは、病院を後にしていた。

「今日は、ありがとう。紐の組み方まで妹に教えてくれて。
真美^{まみ}は身体が弱いからどうしても気持ちが入ってしまっただ。
君のお陰でこれから外に目が向きそうだよ」

真純の妹真美は、色白の肌を持った気の優しい女の子。
花束の作り主の出現に大喜びしたことで図に乗ってしまった私は、
彼女に四葉をはじめ紐の組み方を幾種類か教えてあげた。

「うちの母を楽しませてくれたお礼と、
あなたと違って気の優しい真美ちゃんのためよ。
決して、あなたのことを認めたくはないから」

「別に、認めてくれなくていいよ」

真純はそう言いながら、
玄関前の駐車場に止めてあった白い高級車の助手席のドアを開いて
いた。

「ただ僕は、君の泣きはらした顔を病気のお母さんに
見せたくなかっただけなんだ。お母さんの病気、重いんだろう？」

「そうだったの、やっぱり見られたのね……。え？」

私は普通に返事を返したあと、
真純の言った言葉の違和感にハツとした。

病院にいるからと言って、
全ての人の病が重いと考えるのはおかしいと思ったのだ。

じゃ、なぜ彼はそんなこと言ったのか……。

そういえば、彼は花屋の土地のことを詳しく知っているようだった。
調べたのか？それとも、本当にたまたま偶然？

彼を悪く考えたくなくて、いいほうにばかり考えが偏ってしまっ。

だが、それで納得できるはずもなく、頭は混乱してきた。

お母さんの病気、重いんだろう？

そんなこと、たまたま偶然では言えないはず。

彼は、私の素性を知っている。

母の病気のことまで調べ上げたんだとようやく答えを出すことが出来た。

「あなた、私のことを調べたの。土地のため？」

それは凶星だった。

私のひと言で、真純の表情から一瞬にして穏やかさが消えたのだ。

そう、この表情見たことがある。

一番最初、彼の目的が分かったときの表情だ。

この顔が……彼の仕事の顔。

真純は、目を細めると私をじっと見据えている。

そして、こう言った。

「ああ、君を知る上で興信所で調べさせてもらったよ。はなみ花屋の資本金から収入の移り変わり、借金の額、家族構成、そして学歴もだ。大酒飲みの父親と別れたあと、母親は祖母が大切にしていた花屋を守り君を育てた。母親の病気をきっかけに、あの小さな土地を君に相続し運営をすべて任せた。君だっているんな苦勞をしているようだ」

そんなことまで！

開いた口が塞がらなかった。
家の事情が全て調べられている。

土地には関係ないプライベートなことまで……。
嫌悪感が全身に走った。

「そんなことまで分かってるんだったら、
同情して買収を諦めなさいよ。土地なんて腐るほどあるでしょう」

そんな言葉にも動じず、フツと真純は笑った。
その笑みは、葉子の心をかき乱すくらい嫌な笑いだっただ。

「同情で仕事は出来ないよ。人の悲しみを聞いて
いちいち同情するくらいなら、今、君の前にはいない。」

君が怒るからしないけど、本当は、癌のお母さんも利用させてもらいたいくらいだ」

癌のお母さんも？

声が出ず、気道に風だけが入ったような音のど元から聞こえた。

息を呑むというのはこういうことなのか？
あまりにもショックなことを聞かされて、
言葉がでなかった。

第18話

本当は、癌のお母さんも
利用させてもらいたいくらいだ。

こんなことを平気で言えるのは
きつと、冷たい血が流れる悪魔くらいだ。
あんなに優しかった彼とのギャップが信じられなかった。

「ひどい！どうしてそんなこと言うの？
本当のあなたが分からない。優しいんだか、冷たいんだか」

真純の言葉に、涙が溢れてきそうになる。
いくら敵視しているとしても、
そんな言葉を彼の口から出してもらいたくなかった。
嘘だといってもらいたかった。

……だが。

「ああ、ひどいよ。」

僕は自分の目的のため、仕事ではいろんなことをやってきた。
相手を自殺にまで追い込もうとしたことだってある。
だけど、それはお互いのためなんだ。
君だって、こうでも言わないと目が覚めないじゃないか」

お互いのため？

それが、彼の本音だった。

そんなこと一方通行の

自己満足としかいえない……。

気持ちを逆なでし続けている彼に力チンと来た。

「何をいつてんの、自分勝手すぎるわ！

冷血人間！あなたには情ってのがないのよ」

何かが気に触ったようで

真純は、眉をひくりと震わす。

そして、私を睨み返しながら、

鼻先が当たるくらいに顔を近づけてきた。

「じゃあ、聞くが……」。

君の情ってなんだよ？身を滅ぼすための情か？

昔流儀のやり方ばかりを続けてどうするんだ。

世の中は、随分物価も上がったっていうのに儲けも考えずに首絞めて、

そんなに技術があるのにそれも眠らせたままだ。

人情だ何だと執着して、本当に守らなければならぬものを見失っている。

君は簡単に土地と店を守るとか言ってるけど、

そんな甘い考えでは守れない。

それどころか、借金ばかりが増えて後に自殺することになるぞ。

現実を見る、僕と正々堂々戦え！

資料も見ず、ただただ反対ばかり言っていないで、

敵の懐に飛び込んで相手を知ってみたらどうだ……。

気に食わなければ、僕を潰せばいいんだ！」

分かっている！

今のやり方では何も変わらないことぐらい

言われなくても分かっていた。

だが、ストレートすぎる真純の言葉を受け入れるには

長年このやり方でやってきた花屋としての
プライドの壁が厚過ぎて。

「い、いいわよ！説明会でも会社でも何でも行ってやるわ。
あなたを潰して、店を守る！！」

素直になれない。

結局、売り言葉に買い言葉を返してしまった。

本当は、彼と戦いたくなんかなかった。

でも、これで本当の敵になったのだ。

そして、彼の優しさを受けることなんてもうなくなるだろう。

彼との間に出来た大きな距離に彼の意気込みの強さがぶつかり、
ずっと我慢していた涙がほろりと頬を伝わった。

「だったらあなたとは本当の敵だわ、もう優しくしないで！

こないだだって、魚屋の多美子さんから変な誤解をされたでしょ。
母だって誤解してる。いい迷惑なのよ」

心は迷惑だなんて思ってない。

だけど、同情にも似た優しさなんて受けるのはもう空しいだけだった。いっそ、冷たくされた方が気持ちも整理できる。

だが真純は、この言葉に大きく動揺しているようだ。苦虫を潰したように顔をしかめると、一途に向けていた瞳をそらした。

「今から会社に来い！僕が何をやってるか教えてやる」

「ちょ、ちよつと」

私は、腕を掴まれ拉致のように車に押し込められた。

飛び出す間もなく真純が運転席に乗り込み鍵を閉めた。彼のフレグランスの香りからふわりと包まれると、ふたりだけの空間を感じ胸が高鳴りはじめた。

悔しかった。

こんなシチュエーションでもなお、心は彼を想っているのだ。切なさで溢れる心を止めることは出来なかった。

「なにするのよ、電車で行くからほつといて！
もう、私の心を乱さないで、敵だったらもつと冷たくして！
あなたの車なんかには乗せないで、
ふたりつきりなんて、もうよして……辛すぎるのよ」

あまりにも興奮しすぎて私は心の言葉まで喋っていた。
途中ではたと気付いたのだが、
既に時遅く一気に気持ちをぶつけていた。

助手席の鍵を開けようとするがびくともしない。
私はロックを外すために運転席の内ドアに手を伸ばす。

私の身体に彼の身体が触れた。

胸の膨らみが彼の身体に当たっていると分かっているけど、
それを離す余裕なんかなかった。

「葉子さん……」

彼から声掛けられている。
無視して鍵に手を掛けると、
大きな手が私の手を包みキュッと握った。

「僕だつて……」

「えっ？」

私は、バタバタ動かしていた身体を止めると真純を見上げる。
涙でぺとぺとになった顔を、
彼は苦しそうな表情で見つめていた。

「……ふたつの立場で、身を引き裂かれそうな思いだ」

「真純さん……？」

彼の手に力が入る。
大きな指が掌へ食い込むくらいに、
更にギュッと握り締められた。

真純の温かい手……。

パニックになっていた心が、落ち着きを取り戻してゆく。
私は、密着しすぎていた彼の身体から自分の身体を離し、
助手席に座り直した。

どきどきがとまらない。

相変わらず、私の右手は握られたまま。

そして、フロントガラスに視線を向けた真純は、私の手を握ったまま車のエンジンをかけた。

第19話

ふたつの立場で、身を引き裂かれそうな思いだ。

その言葉が、幾度も幾度も脳裏に浮かんでくる。それはきつと、私の右手がまだ彼の掌に包まれているからだと思う。静かに車窓の風景が流れていく中、鼓動だけが激しく鳴り響いていた。

ふたつの立場ってなに？

そんな分かりきったことを彼に聞くのも、野暮な気がした。ビジネスとプライベート、彼はその中で身を引き裂かれる思いをしているというのだ。

ビジネスは、もちろんん土地の買収。

そして、プライベートは……。よく受け取れば、真純が私に対し好感を持っているということ、普通にとればただの同情だ。

私にとっては、その位置は天地の差。でも、彼が握ってくれているこの掌の温かさを感じるに、ただの同情ではないような気がした。

「葉子さん」

「は、はい！」

突然の彼の声かけに私の声は裏返り、意識しまくりだということを真純にアピールしてしまう。

「ひとつ会社用の花束作って、水着と帽子とゴーグルを準備して。一番近くのFIEに案内するよ。」

あっ、嫌でも敵内偵察だっと思ったら大丈夫でしょう？」

結局、あの言葉の意味を知ることもなく、私と彼は再び敵同士になった。

だけど、さっきまでの敵とは意味合いが違う。まだ繋がれている手からその答えが伝わってきた。

自宅に戻った私は、涙で剥がれてしまった化粧を施し、水着一式を準備した。でも、心は上の空だった。彼が車の中で言った言葉が、気になって仕方がない。

「ゴーグルと帽子と…あと、水着…ええっ、うそ!？」

だが、それどころじゃなくなる。

私は、手に取った紺色の水着に愕然とした。

実は、高校卒業してからプールに行ったことなんてなかった。一度だけ詩織に引き摺られるように海へは行ったが、さすがにそのビキニじゃスポーツクラブには行けないだろうし……で、持ってるのは、このスクール水着だ。

やっぱり着てみるとピチピチ気味の水着。

特に胸の辺りはきつくって……。

そんな姿を彼の目に晒すなんて、恥ずかしくてたまらなかった。

「でも、ないし……。あ、そうだTシャツ着ればいいんだ」

私は、ほとんど海に行く感覚で

たんすの奥にあったTシャツをバッグに入れた。

「す、凄い」

隣駅の駅前には、人々の活気にぎわっていた。

ほんの5年前までは、閑古鳥の鳴く商店街であったが、今はそんなことさえも分からないお洒落な街並みとなっている。

その中でFIEは、駅前の一等地に立っていた。

スポーツジムとは分らないほどのお洒落なビル。

隣のビルは一棟丸ごと駐車場で、

そこは有料だが他の店と共有できるようになっていたようだ。

真純は、その駐車場に車を止めると助手席のドアを開けた。

「うちの会員は駐車場3時間無料なんだ。

部外者は、時間制だが比較的安い値段で長く利用できる。

うちと提携しているショップで買い物すれば、1時間無料だ」

真純は、私の隣につき心地よい靴の音を響かせながら説明をしてゆく。駐車場の造りもよく考えてあり、クラブ利用者に一番都合の良い造りになっているとのこと。

「早速営業ね」

「君だって偵察でしょ。入り口はこちら。どうぞ」

駐車場からは、そのままクラブへ入れる仕組みになっている。受付には3人の女性がいて、大きな挨拶に素敵な笑顔を見せてくれた。

「会員は、ICカードでそのまま改札機を通って中に入れるんだけど」

そう言いながら真純は、私が作った花束を持ち受付嬢の元に進んだ。

「副社長、お疲れ様です」

「お疲れ様。また、この花束飾っておいてくれ、

そして、今日はこの花束の製作者を連れてきたよ。
はなみ花屋の店長、羽並葉子さんだ。会いたいって言ってただろう？」

そのひと言に、受付の女の子たちは喜び始める。

私は、その大げさなほどの感情表現にびっくりしていた。

「きゃ、握手してください〜！」

「わあ、この小さな手であんなすごい花束作ってるんですね」

「今日は手を洗わないことにするわ」

ほとんど、人気女優並みの待遇。

その理由はこうだった。ひとりの受付嬢が一枚の写真を取り出して見せたのだ。

それは、葉子が作った紅い薔薇の花束を持った女性と
真純のツーショット写真だった。

隣の彼女の顔は真っ赤で泣きはらした感じで。

「週1回、副社長が持ってこられる花束が
すごく合ってるって社内で評判だったんです。

この間なんて、結婚退職する社員が……この写真の人ですけど、

副社長から花束貰ったら突然泣き出して、
やっぱり辞めないって駄々こねたりしたんです。
副社長から紅い薔薇なんて似合い過ぎるから、感動したみたいなん
ですけど」

「こんなセンスのいい花屋さんってあまりないわね」

「そうそう。でも、副社長に言っても場所を覚えてくれないんですよ。」

ひどいと思いません店長。営業妨害ですよね」

「でも、会えて嬉しい〜」

どうやら、この受付嬢3人は話し出したら止まらなくなるらしい。
盛り上がり始めた3人のテンションを止めるため、
真純は、咳払いすると「ほら、仕事しろ」と言った。

第20話

「FIEは、1階が受付で、2階から上がスポーツ施設になっっているんだけど、君の商店街に建てる予定のビルは、ちよつと志向を変えてみたいと思ってるんだ。」

「……こんにちは、いらっしやいませ。」

「……お疲れ様です、いい汗かきましたか？」

彼もそうだが、この施設のスタッフは客に対し清々しいほどの挨拶をする。

「あっ葉子さん、このベンチでちよつと待っていて」

この施設に入った途端、

真純の雰囲気はぴんと張り詰めるような空気が加わった。

私に施設の説明をしながら、彼の意識は、客や施設内へも向けられている。

極めつけが、廊下の端にほんの少しだけ落ちていた水。

真純は、その水にティッシュを乗せた後、

すぐに近くにある内線電話で、支配人を呼び出した。

普通なら、気がついた人がすぐに拭けばいいという話。

わざわざ呼び出す必要もないのではないかと思いつながら、

彼の動向を観察することにした。

支配人に話をする真純の表情は、物凄く真剣で、

震え上がるぐらいに威圧感がある。

廊下の端でほんの少しのものだから、

たまたま気づかれずにいただけではないか。

お客のいる前でこつも従業員を怒らなくてもいいのに、そう思わせるぐらいに。

「……………このクラブは、ご年配や体のご不自由なお客様もいらっしゃる。

特にサイドは手すりが付いていて、その方たちの往来もあるわけだから

このくらいの水でも、十分に滑るんだ。

クリーンスタッフだけでなく、従業員全てに注意するよう徹底してくれ」

「申し訳ありません、副社長。私含め、従業員一同徹底させます」

どう見ても真純よりも年上の男性が、

自分の息子ほどの副社長に頭を下げている。

客に見られながらのこの状況は、

仕事といえども支配人にとっては屈辱的なものだろうと察した。

話が終わると、支配人は持ってきた雑巾で床を拭こうとしたのだが、それを真純は制止した。

「後は僕がします。マネージャーは、仕事に戻って」

支配人は、あきらかに恐れ多いという顔をしながら

自分がすると言い張った。だが、真純は首を横に振ったのだ。

「僕は、マネージャーに掃除をさせるため呼んだのではないですから。

現情を知ってもらい皆に報告してもらったためです。すぐに仕事に戻ってください」

「は、はい。申し訳ありません」

深々と礼をすると支配人は、踵を返す。

それを見届けると真純は私の元へと帰って来た。
私の顔を見ても仕事の表情を崩さない彼、怖さでちょっと声をかけられない。

「ちょっと持ってきてくれる？」

そう言うと、大きなジャケットを脱ぎ、私に手渡した。

真純は、背中を丸め床を雑巾で拭いていた。
スーツを着ている彼が掃除をしているなんて、すごく変な構図だ。

「しつこいようだけど、あなたって冷たいんだか優しいんだか分からないわ」

私は、彼の広い背中を見ながらそう言った。

彼は、ごしごしと床を拭きながら返事する。

「お客様の前で、あんなに叱って最低な奴だと思った？」

「まあね。どう見たって、あなたのお父さんくらいの年齢の人よ。屈辱的だわ」

「仕事に年齢差なんて関係ないと思うけど？」

悔しいと思うなら、従業員の教育を徹底すればいい話だ。各支店のマネージャーはね、僕らトップの代理でもあるんだ。常に任されているという意識を持ってもらわないと困る。床が汚れているのにひとりも気付かなかったというのは、お客様のことも気配れてないということだろう？」

まあ、それはそうかもしれない。

「だからといって、こんなところで。客もひくわよ」

「そうだろうか……」

ぼつりと呟いた真純は、ようやく腰を上げると、雑巾を洗うためトイレへと入っていった。

『中で待ち合わせ、25Mプールの前だ』

『えっ、あなたも入るの?』

『今日は、昼からオフだからいいの』

『プライベートじゃ辛いから、付き合わないんじゃない』

『いいじゃないか……誤解されないようにすればいいだけなんだから』

『それは、そうだけど』

そして、チラリと私のバッグに目を落とした真純は、

突然こう言った。

『ちょっと聞くけど……もしかして、水着の上にTシャツなんて着るつもりじゃないだろうね。葉子さん』

『えっ?どうして。いけないの』

『どんなに新品のTシャツでも、ここでは不衛生ととるんだ。水質を悪くしないためだよ。そんなに、肌を晒すのが恥ずかしい?』

私は、彼の視線が気になって慌ててバッグを覗き込む。

開いたファスナーの隙間から覗き込むTシャツを、そそくさとバッグにしまった。

『そうよ。スクール水着だから恥ずかしいの。絶対、見ないでよ』

『はいはい、じゃ、君の顔だけ見えます』

私の反応を見ながら、くすくすと真純は笑った。

『それも嫌なんだけど』

『じゃ、どこを見たらいい?よその女の子でもいいってわけ』

更衣室に入る前にそんなやりとりがあった。
なんかいちいち癪に障る言い方をする真純、
私が彼を好きだという気持ちを利用して
もて遊んでいるのじゃないかと思ってしまった。

更衣室はとても清潔感があり、一番気になる化粧コーナーも髪の毛
ひとつ落ちていない。
彼が言った、『まず入ったら、化粧台を見て』という言葉が良く分
かった。

『いやあ、さっきね。すごいもの見ちゃった』

すると、隣の更衣室から、熟年風の女性達の会話が聞こえてきた。その内容は、さっきの真純と支配人の事のように。

「どう見ても自分の息子みたいな人から、

ここの支配人が物凄い剣幕で怒られていたわよ」

「あの若い人、副社長よ」

「ええっ、あんな若くていい男が副社長？インストラクターかと思
った」

「なんだか、水がこぼれていたとかで注意してみたんだけど、
確かに危ないわよね。若いのによく気が利くと思っただわよ」

「でも、嫌じゃない？私たちで言うと

20歳ぐらいの女の子から怒られるわけでしょう？」

ほらほら言ってる。私は内心そう思った。

まだ年の若い自分でさえ思うのだから、

この人たちがそう思うのも無理ないと思った。

完全なるFIEEのイメージダウンだ。

だが。

「だけどここって、髪の毛ひとつ落ちてないし、

足拭きマットはいつも乾燥してるじゃないの。

それは、上の指導がちゃんと行き届いているということなのよ。

水だって、もしこけて骨折でもしたらすごい責任問題になるから、シビアになるわよ。でも、私ずっと話し聞いていたけど

会員のことを一番に考えているようで悪いトップじゃないと思うわ。ただ叱って追い詰めるんだったら、掃除だって支配人にやらせてる。でもビシツと言いながらも、見つけた自分がせつせと掃除をやってるなんて、

従業員と対等な立場にいる証拠よ」

「確かにそうね。お客のこと気にしてもらってると思うけど、私たちも安心して施設が使えるわ。一気にファンになっちゃいそう。顔も素敵だったし、久々に大ヒットじゃない」

おばちゃん、恐るべし。

彼女たちは、あのやり取りをずっと聞いていたんだ。

このくらいの熟女の噂話は、物凄い勢いで広まる。

よいことは広がらないが、悪いこととなるとまるで火がついたように噂が飛んでゆくのだ。

逆に、ああやって悪いところはその場で注意する方が、

従業員の意識を目覚めさせ、お客に対しての誠意に繋がるのかもしれない。

なんだか、敵内偵察などといわれながら、まんまと彼の策略に嵌り込んでいる気がする。すごく、やばい気がしていた。

第21話

「え、やっぱり嫌だわ。ピチピチ」

私はシャワーを浴びた後、
プール入り口にある姿見に映る自分にかっかりしていた。
やっぱり帰ろうか、今ならまだ引き返せるそう思ったとき。

「葉子じゃない！」

聞きなれた囁れ声、魚屋の多美子さんから背中を叩かれたのだ。

「へっ！」

驚いて振り向いた私の顔は
爽やかなスポーツクラブに不似合いの悲痛な顔をしていたようだった。

『暗いわよ!』と言いながら彼女は豪快に笑い、
そして、先輩気取りに胸を張って見せる。

「あなたも、あいつに誘われて体験に来たの？」

心配しなくてもスポーツクラブって結構面白いわよ。

せっかく体験来たんだし、思いつきり利用させてもらわなければね!
私、2時間歩いてきたから、今度はエアロビクスってのにチャレン
ジしてみる。

じゃ、さよならなら」

「ちょっと、多美子さん。私もエアロに……」

「運動できる服あるの？」

思わず詰め込んだバッグを見下ろしていた。

真純から言われたものだけしか準備してなかったのだ。

水着とTシャツ……多美子と一緒に行動できない現実を理解すると、
がっくりと肩を落とした。

「ない……です!」

多美子は、たふんと脂肪の付いたお腹を軽く2回叩くと笑う。
『体型的には心配するな』とでも言いたげに。

「水着姿が恥ずかしいの？大丈夫よ。

午前中はあの塩崎さんだつて入ったんだし、
中はほとんどこんな体格したおばちゃんか、おじちゃんばかりだから。

あつ、若い人目当てだつたら夜かジムがお勧めらしいけど……。

じゃ、もう始まるから行くわね。25Mプールはあつちで、こつちは50Mよ。

絶対、行きなさいよ。もったいないからね」

敵の施設を存分に楽しんだと思われる多美子は、
鼻歌交じりで更衣室へと帰ってしまった。

私は、仕方なく多美子から言われた25Mプールへと向かうことに
した。

なんだか、心はさわさわと空しい風が吹いている。

実は、真純は自分のことだけ誘ってくれたのだと思っていたのだ。
特別扱いされたと有頂天になっていた心は、
まるで割れた風船のように小さく縮んでしまっていた。

プールは、昼の時間帯なのに結構な人で賑わっていた。

真純は、既に25Mプールで泳いでいて、私の姿を見ると手で招く。早々に水に入り、彼に近づくと隣に付いた。

「葉子さんて、意外に着やせするタイプなんだ」

「それって私が太ってるって言いたいの？」

「いや、結構スタイルいいかなって思った」

そう言って、チラッと真純の視線が落ちる。

「もう！見ないでって言ったでしょ」

「ごめん、ごめん」

私は胸を隠すと、失礼なくらいに笑う彼を叩こうとした。そこで、ギョツとした。

彼の厚い胸板が、すぐそばにあったからだ。

いかにも、何らかのスポーツをしていますと主張する肩と胸の筋肉。首筋から顎にかけてのラインはスーツを着ているときよりもがっしりとしていることに気付いた。

まるで、彫刻のような体の一部を見てしまった私は、心臓の拍動を早めていた。

「君だったらスイムウェア似合うと思うんだけど……。じゃあ、見ないように泳いできます」

真純は、波も立てずにプールに潜ると、泳ぎ始める。

ドルフィンキックから軽めの背泳、素人目から見ても、彼の泳ぎは優雅で水面を滑るように進んでいた。

「どうして、泳がないの」

あっという間にターンして戻ってきた真純は、私に声をかけた。

「実は、泳ぐの久し振りです。得意じゃないの」

「あっ、そうなんだ。それは申し訳ないことをしたね」

苦手なプールに無理矢理連れてきたことを申し訳なく思っているよ
うで、

残念そうな表情をした真純は、プールの端を指さした。

「もし泳ぎたくないということならば、あの端の歩行用レーンを歩
いてもいいし、

もし、泳いでみたいのであれば僕が教えてあげるよ。

これでも、大学のときはFIEで水泳のインストラクターのバイト
をしていたんだ」

「へえ、何でも泳げるの？」

私は、泳げる人をすごく尊敬する。

イルカのように泳げたらどんなに気持ちがいいだろうと、小さい頃からずっと思っていたのだ。

「一応、一通り。自慢じゃないけど高校生選手権水泳競技大会200Mバタフライ二期連続優勝者ということ……今はもうあんな記録出せないな」

「十分に自慢よ。だけど、凄過ぎるわ。ねっ、泳いでみて」

「ゆっくりでいいから」

私は彼にせがんでいた。

競技大会の優勝者の泳ぎだなんて、そう見る機会はないからだ。

そして、私の無理な頼みに、

真純は嫌がることもなくいいよと笑みを返してくれた……と、そんな矢先、

彼はとんでもない事をいい始めたのだ。

「そつだなあ、見返りは何にしようか？

今日のディナーは一緒にということだ。

じゃ、そういう事で葉子さんのために頑張ります」

「ちよつと！勝手に約束なんて……」

『やめて……』と言っはずだった。

だが、私は、その言葉を呑み込んでしまったのだ。

なぜなら、はるか向こう25Mレーン先を睨んだ真純の瞳は、
闘争心むき出しの光に変わっていたから。

仕事のとぎとまた違う雰囲気、すっかり呑まれてしまっていた。
彼は、再び黒のゴーグルをかけると位置に付いた。

第21話（後書き）

ドルフィンキック……両足を同時に上下させ、足の甲で水を蹴ること。

バタフライや背泳ぎのスタート直後に行う。イルカ蹴り。

第22話

真純は、静かなスタートを切った。

ドルフィンキックで水中を突き進む。

ストロークを始めた彼の身体は綺麗なストリームラインをとり、水面をうねり進んでゆく。

さっきの背泳とは全く違う……。

水を味方につけたエネルギーで豪快な泳ぎに、私は魂を揺さぶられるような感覚に陥った。

彼はまるで、海を渡る野生のイルカの様だった。

「さっきの副社長が泳いでいるわ」

「すごく綺麗なフォームね。まるで、外国の水泳選手みたい」

私のすぐ横のレーンで、おばちゃんたちが騒ぎ始めていた。プロ級の泳ぎは、広いプールの中でもひとときわ目立っていた。

「私もバタフライだけは泳げなくてね。あんなに楽に泳げたら気持ちいいだろうに……」

おばちゃん同士の会話はあまりにも大きすぎて、私の耳まで聞こえてきた。

彼女曰く、バタフライは4泳法の中で最もエネルギーを必要とする泳法なんだという。

だから、水の抵抗を避ける技術を身につけることが、より速く泳ぐポイントなのだと話していた。

……と、言われても私には何のことだかさっぱり分からないんだけど。

「はあ、もう100行っただわよ。まだ行く気？
ねえ、ちよつとあなた。彼の恋人？」

「はいっ？」

いきなり、肩を叩かれた私は、おばちゃんの輪の中に引き込まれる

ことになる。

何を聞かれるのかと思うと、ちょっと怖くてドキドキした。

「いえ、ただの知り合いです」

「彼、この副社長でしょ。何M泳ぐの？」

私は、彼女たちに200M泳ぐのと言った。

彼が競技大会の優勝者だと説明すると、やはり驚きの声が上がった。

「でも、皆さんも泳ぎはマスターしておられるんですね。羨ましいです」

「羨ましい？」

本当に彼女たちは、泳ぐのが好きなようだった。

私の言葉に気分をよくしたようで、何が泳げるのか自慢大会のようになる。

そんな話の中、更衣室で真純を気に入ったと言っていた女性が、話し始めた。

「私たちもここに来た時は全く泳げなかったのよ。」

この人、里佳さんなんてね。5年前まで、歩くのに不自由していたのよ。」

彼女が紹介した人は、真純のフォローをしていたあの女性であった。

いまや、3泳法をマスターしているという里佳というこの女性。

脳梗塞の後遺症で半身に麻痺が残り、運動障害を起こしたという。辛すぎるリハビリも断念し身も心も疲れきった頃、医者から水中歩行を勧められ、

その当時近所に出来たばかりのFIEの会員となり、毎日通ったのだという。

「ほら、若い人に話してあげなさいよ」

そう言われて、里佳は話を始めた。

「ここはね、他のスイミングクラブにはない

水中運動プログラムという時間があって、

運動障害がある人のためにいろんな機能訓練をしてくれるの。

そんなこんなで、少しずつ体が動き始めるとなんだか泳ぎたくなくなってクロール初級というプログラムから習い始めたのよ。

後遺症は若干残っているけど、これだけ動けるようになってほんと生き返った気持ちだわ」

FIEは、健常者と同様、身体に障害を持った人や体の機能が衰えた人にもとても優しいクラブだと里佳は話した。パンフレットに書いてあるということだが、リハビリなどを求める人のためにも、身近に利用できるクラブを増やしたい……というのがFIEトップの思いらしい。

ああ、意外なところから、真純の目的を知ることとなった。

FIEをこよなく愛する利用者、その言葉は一直線に私の心の中へと入ってゆく。

「私、スポーツクラブってただの娯楽施設だとばかり思っていました」

「あなた若いのおばちゃんみたいな考えね。あそこの歩行レーンで歩いているグレーの水着のおばさんは、肥満で関節痛に悩まされて、でもここに来てあんなに痩せてね。そう、あそこのおじさんは、腰椎ヘルニアの手術をしたあとに、医者からここのプールを勧められたらしいわよ。体力をつけるための人も多いけど、いろんな悩みを克服するために来ている人が多いの」

「そうなんですな」

私は、最終ターンで戻ってくる真純を見た。

僕と正々堂々戦え！資料も見ず、ただただ反対ばかり言っていないで、

敵の懐に飛び込んで相手を知ってみたらどうだ……。

彼が、私に言った言葉を思い出していた。

確かに、私は強面の従業員から貰った資料をチラリと見ただけで
それ以後は何を言われようと破棄していた。

だが、今のあの土地に計画されているのは、ただ若者が娯楽する施設ではなく、

本当に悩んでいる人にとっては、救世主のような施設なのだ。

今ほとんど遊ばせたままのあの土地、需要が少なく閑古鳥が鳴いているような土地。

FIEだったら、その土地を人々のために有効活用してくれるのか
もしれない。

真純は最後の25M、スタートのときよりもスピードを上げ泳いで

くる。

一生懸命な彼の姿を見てみると、彼の望みをもう少し知ってみてもいいかなと思った。

真純は、残った力を振り絞り壁にタッチする。

彼は水面から身体を出すと、ゴーグルを持ち上げ、乱れた息を整えるため大きく深呼吸した。

「はあっ……」

呼気とともに彼の声が漏れ出す。

意識しているせいか、それは甘い吐息のようにも聞こえ、私の胸をきゅんと切なくしていた。

第22話（後書き）

ストローク……水泳で、腕で水をかくこと。また、そのひとかき。
ストリームライン……流線型

第23話

「す……」

「すごい、副社長!!」

真純の文句ない泳ぎに声をかけようとした私だったが、おばさまたちの感動の声に消されてしまった。

「完璧な泳ぎよ、さすが競技会優勝者だわ」

いきなり複数の女性たちから私越しに声をかけられ、真純自身も驚いているようだ。

「今日はプライベートなんで、恩田と読んでください。競技大会優勝者といっても昔の話で、すっかり息が上がりました。」

あ、みなさんも泳ぎが出来るようですね。
新作のスィムウェアがよくお似合いで素敵ですよ」

「すご……、分かるんですか」

褒められた彼女たちの頬が、ほんのり色づいた。

新作の競泳水着を言い当てた彼にすっかり心を奪われたようで、おばさまたちは我先にと自己紹介をしていく。
女性が心地良くなるように、上手く話を持ってゆく彼のセンスは、誰かに似ていた。

まるで、ホストだわ。

詩織に連れられてただ一度だけ行ったことがあるホストクラブ
指名第一位の達也くんによく似ていると思った。
女性をその気にさせるテクニクは、まさにそのもの。

だが、一番彼に近いのは私なのに、頭の上で会話は進み、
ひとり取り残されたような気分になっていた。

あんな意味深な発言をしても、優しく接してくれても、
所詮は私もこのおばさまたちと同じにあしらわれているだけなのか

も知れない。

私は、欲しい土地を持っている大切なお客さまだから。

……そんな嫉妬めいた思いに気付くと、より一層空しくなる自分がいた。

こうなったら泳いでやる。

私は、その輪から外れるため泳ぐ決心をした。

高校の水泳で、ぎりぎり25Mは泳いでいた記憶があるから、クロールぐらいだったらいけそうな気がしたのだ。

彼に対するいろんな思いを紛らすため、私は大きく息を吸って水にもぐる。

真純から名前を呼ばれるのをぶくぶくと泡立つ水の向こうに聞きながら、

私はクロールを泳ぎ始めた。

足は、ばたばた、そして手を回す……。

なかなか上手く進んでる？

随分昔に泳いだ記憶をたどりながら進んでいく。

結構忘れていないものだと思った。

だが私は、ハツとした。

い…息継ぎって、どうするんだっけ？

私は、致命的な事を忘れていたのだ。

もちろん、横を向いて息することぐらい知っている。

だけど、どんなにやっても、体が横を向かないのだ。

慌てる息が苦しくなり。

でも、まだこんなところで立つ事は、恥ずかしくって出来ないし。

そして、体はどんどん緊張してゆく。

前にも進まず、バタ足を早くすると足が疲れていくのがわかった。

その時だった。

右のふくらはぎに鋭い痛みが走ったのだ。

それが、こむら返りだということにすぐに気がついた。あまりの痛みのため、私は途中で止まってしまつ。酸素が欠乏し、頭はくらくらしている。最悪の姿であつた。

「葉子さん、どうしたの？」

私の異変に気付いた真純は、おばさまたちの輪から急いで飛び出し、クロールで私の元にやって来てくれた。助けてくれるんだと思うと安堵し、涙が溢れそうになる。

「どうした？」

だが、顔を覗かれると恥ずかしくて言い出せなくなった。いい大人が泳ぎも出来ず、おまけにこむら返りしたただなんて、みつともなさ過ぎて知られたくなかつたのだ。だから、彼の助けを無視して、ひとり歩き出そうとしてみた。しかし、痛みに顔をしかめる。

もう、自分ひとりでは対処できなくなつていた。

「どうしたんだ。足がつったのか？」

「うん……」

よじやく、言葉が出た。

馬鹿だな……

彼からきくと笑われる、そう思った。

第24話

「じゃ、ちょっと痛いけど。ゆっくりやるから」

「いたたた……」

彼は、医務室のベンチに私を座らせると踵を固定し、足のつま先を持って押し上げてくれた。

私は、目の前に見える彼の俯く姿と、パープルのジャージジャケットから垣間見える胸板への視線を外せない。

それに心臓は、はちきれんばかりにドクドクいていた。

その後、私をプールサイドまで誘導してくれた真純は、私の身体をひよいと抱え上げると医務室まで連れて行ってくれたの

だ。
じかに触れた^{たくま}遅しい彼の胸板の感触と温かみに、
私の脳は混乱を起こし、オーバーヒート寸前となり……。
痛みを訴えながらも下ろせと暴れた私に、彼はこう言った。

『みんなに誤解されたくないんでしょ。じっとしてて、病人は病人らしく！』

病気ではないし、十分に誤解される姿だとは思っただが、
彼は下ろしてくれなかった。

一体彼は何を考えて、平気でこんなことをするのか。

しかし、どうあがいても男性の力に勝つことは出来ないので、
仕方なく彼に抱かれることにした。

酸素不足と興奮とが入り混じった、荒いままの私の息。

それはきつと、彼の胸元に届いていたと思う。

「酸素です。白いラッパの部分を口に当てて、
大きくゆっくり息を吸ってください」

真純と同じジャージを着たスタッフから酸素を貰った私は、彼の言うままに酸素を吸ってゆく。大きく吸い上げると、肺の中に新鮮な空気が入っていくようで気分が少し楽になった。真純は、そのスタッフに蒸しタオルを持ってくるよう言うとキッと私を睨んだ。

「準備運動もせずに、いきなりクロールなんか泳ぐからだ。それも、素人が息継ぎもせずに25M泳ごうなんて、自殺行為」

「う、ごめんなさい」

笑われるどころか、彼から真剣に怒られた。

嫉妬などという低レベルなことから、大きな失敗をしてしまった私は、

かけられた毛布の中に身を埋めるように背中を丸めると、申し訳なさそうに彼を覗き込んだ。

「まったく、心配かけて」

真純は、ため息をつきながら足の処置を続けた。

恐々な視線を向ける私に気付くと、目を柔らかく細め微笑んだ。

「クロールはね。呼吸法にコツがあるんだ。それを覚えると、すごく楽に泳げる。今度教えてやるよ」

「え、ええ……」

彼の優しい声に導かれるように、つついOKの返事を出してしまっていた。

でも、意思に反したものではなかった。

それは、プライベートでまた彼に会えることを期待したからであった。

「痛みがなくなってきたでしょう?」

「本当ね。すごい」

かなり長く彼から処置をしてもらったと思う。

真純は、当てていた蒸しタオルを外し、

私の足の筋肉の状態を確かめると軽くポンポンと叩いた。

「今日は、もう上がるう。お腹も空いたし、食事に行こうか」

真純は、私に手を差し伸べる。
私は、彼のがつしりとした手を取ると立ち上がった。

ぱちぱちぱち……。

捻った白手ぬぐいを巻いた店長が、
私のすぐ目の前で煙に巻かれながら焼き鳥を焼いている。
隣には、スーツのジャケットを脱いだ真純がいて、
グラスに並々と注がれた焼酎を飲んでいた。

ネクタイを外しシャツの第一ボタンを外している彼、
白いシャツ姿もなんだか眩しく見える。

「はい、恩ちゃんと彼女。とり皮に手羽にバラだね」

「ありがとう。おやじ」

クラブから数件先の、この焼き鳥屋。

この街には、あまりお洒落な飲食店がないといいながら連れてきてもらった。

私はライム酎ハイ、彼はこれで2杯目の焼酎で、焼き鳥と店長お勧めの一品料理を食べている。

「で…どう？僕を潰す材料でも見つかったかな？」

今まで、この近辺のお洒落スポットを話してくれていた真純。ようやく、本題といった感じで苦笑した。

「ええ！見つかったわ。たくさんね」

私は、すきっ腹にグイツと入れてしまったお酒で酔っ払っている。ふわふわとした気持ちでクスクスと笑うと、真純をじっと見据えた。

「とんだ娯楽施設だということが分かったわ」

もちろん、それは本心ではなかった。

彼を潰す材料など結局ひとつも見つからないまま、逆にFIEEのよさばかりを知って帰って来たのだ。

私は、いつも詩織から注意されるのが、酔うと出てくるこのからかい癖。

……で、すぐにバレるのが売りだ。

私は、自分の胸をポンと叩くと、いたずらっ子のように微笑んだ。

「トップも従業員も気が利かないし、洗面所も更衣室も汚いし、遊びに来たおじちゃんおばちゃんばかりで、本当に娯楽だった。もう、すぐにでもあなたを潰せるわ。任せといて!」

もちろん、徹底的に教育指導している彼がこの嘘に気付かないわけではない。

真純は、一瞬驚いたように大きく目を見開いたがすぐに目を細めぶぷつと噴出した。

「そっか、いい日になったな」

「本当にいい日よ。敵内偵察のつもりが、まんまと罠に捕まってしまった……みたいな感覚ね」

私は、凄く気分がよかった。

半分になった酎ハイをグツと一気飲みすると、くくつと笑う。

「まっ、ということ罠に嵌ったついでに、

もう少しあなたの考えを知ってみたいと思ったわ。
売り言葉に買い言葉なんかじゃなく、
自分の意思で次回の説明会に出てみようと思う」

「えっ？本当に」

彼にとっては、意外な言葉だったのかもしれない。
真純は口を開けたままポカンとしていた。

「だから、はい耐ハイお代わり。気が利かないわよ副社長」

「あ、ああ」

真純は嬉しそうな表情に変わり、私から耐ハイのグラスを受け取る。
ちよつと彼の視線が外れた隙に、私は言った。

「あなたの目指しているものが、娯楽施設でないと分かったのが、
今日の一番の収穫だわ」

「ありがとう。葉子さん」

真純は、耐ハイのお代わりを頼むと、
スケジュール帳を開きメモ用紙を破りとる。

彼はちよつとだけ営業と言って、それに四角を描き始めた。

第25話

それは、うちの商店街に建設予定の
F I Eの見取り図であった。

「ようやく、正式に決まったよ。詳しくは次回の説明会で話を
する
けど。」

……ここは1階の受付。今日行ったF I Eは父が担当したから
店舗は入ってないけど、ここには雑貨関係の店舗を入れるつもりだ。
多美子さんや塩崎さんは、駐車場の1階に出来るスーパーの中に
入れたいと思う。で、君の花屋はここ」

そこは、1階の入り口。

ここだったら、自然光も当たるし
花も綺麗に飾れるだろうと真純は言った。

「君の花屋を入れたくて、ずっと交渉しようと思っていたんだけど、葉子さんは資料も見えてくれないからさ……参ったよ」

彼はこれが言いたくて、私にずっと資料を持ってきていたんだと思っただ。

最初のFIEの印象だけで、頑固に構えてしまっていた自分が恥ずかしくなった。

「すごい……こんなことまで考えてくれていたの。」

私、あなたから敵対心をもたれているとばかり思っていたわ」

真純は、『確かにひどいことばかり言ってきたからな』と前置きした。

「葉子さんの事、うちの強面のスタッフから聞いていたんだ。」

君は土地開発に関しては、頑固一徹で全く話を聞いてくれない無関心な人だと。

だから僕は、あえて君に挑戦状を叩き付けた。

わざと君の癪に障るようなことをして、目を向けさせようとしたんだ」

その思惑は、きっと成功したのだと思う。
強い怒りのエネルギーを出してくれたからこそ、
彼と対等に向き合うことが出来たのだ。

「だけど…、今回の買収のやり方は失敗だと父からは怒られているよ」

「どうして？失敗じゃないわよ。

少なくとも最後の砦である私が、説明会に行くことになったのよ」

「確かに」

真純はそう言うと焼酎のお代わりを頼んだ。

「だが、君への交渉は、僕が初めて交渉した老舗旅館のときと同じ。それは、買収相手に人間としての情を持ってしまったことなんだ」

「人間としての情？」

君の好きな人情だよ……真純はそう付け加えた。

「その時のことを考えると、今でも夢に魘されるんだ」

彼が土地買収をはじめて任されたのは、大学卒業してすぐのことであつた。

都市の中心地に立つ老舗の高級旅館。

昔は泊り客も多く繁盛していた旅館であつたが、

その街が都市化するにつれ、気軽な値段でに止まれるシティホテルやビジネスホテルに客足を取られ運営が厳しくなつた。

借金もかなりの額抱えていて、

客も月に1件あれば喜ぶくらいに窮地の状態だつたという。

一番良い方法は、FIEの条件をのむこと。

その最高の条件は、どんな素人の経営者でも
答えをはじき出せるくらいに魅力的なもの。

だが、その経営者は十代続く老舗旅館を
自分たちの代で終わらせたくないと言い張ったのだ。

泊り客が増えれば、呆れて出て行った息子夫婦も帰ってくると、
まるで夢のような話をした。

「儲けよりも人情だったんだよ。各界の著名人が泊まった由緒ある
旅館を、

彼らは一般人のために、質を落とすことなく宿泊費を下げた。

だがそれは逆効果で、高級旅館は安旅館のイメージへと落ちたんだ。
由緒ある高級旅館の看板はあつという間に意味のないものとなった」

174

「……経営者向きではなかったけど、
人としては本当にいい夫婦だった……」

真純は、焼酎を一口飲むと、酔いが回り充血し始めた瞳を私に向け
た。

彼らは、真純にご飯をご馳走してくれたり、
あるときはお小遣いと言いながら5千円札を渡そうとした。

身の上話をしたり、一人暮らしの真純の身を心配したり、まるで、自分たちの息子のように接してくれたのだ。

「仕事に関して僕はまだ未熟だったから、身内のような情が湧いて……その人たちの気持ちを無視できなくて、僕は買収を諦めたんだ。銀行も貸してくれないと言うから、FIEと馴染みのある銀行を口利きした」

だが、それから1ヶ月後のことだった。仕事の途中に旅館に寄った真純は

閉館し売り出しの看板が掲げられてることを知ったのだ。

後に聞いた話だが、夫婦はヤミ金融に長い間手を出していたのと、とで、

借金の総額はどうか聞いても彼らには返せないくらいの金額だったという。

真純が旅館を訪れたときには、既に自殺を考えていたのかもしれない。

彼が口利きした銀行にも結局借金することもせず、1週間後無理心中を図った。

「おやじに息が出来なくなるまで殴られたよ。」

借金の全額返済は無理だとしても、買収を受けていれば

細々と暮らしていける程度には減らすことが出来たんだとね。

僕は、自信をなくした。だから、買収に一切の情を捨てたんだ。

これまでに卑劣なやり方もしたさ。
反感も買ったし、追い詰めすぎて自殺されそうにもなった。
だが、僕がやっていることは、体当たりの真剣勝負。
情を出せば相手に引き込まれて終わり。結局は、相手のためになら
ないんだ」

「なぜか分かる？」

彼はいつのまにか仕事モードになっていて、私をきつく見つめた。

「僕らが買収する土地は、立地条件のよさ、
そして、個人では返済が出来ないくらいに借金を持つ土地を選んで
る。

君のところの商店街だって同じさ」

普通に考えれば、多額の借金を持っている弱者を
わざと選び出しているということになる。

それにしても、FIEが提示してくる条件はあまりにも良過ぎて…
…。

「もしかして、あなたの会社は、私たち経営者にとって救世主だっ
ていうの？」

「さあな……、僕らは僕らで君らの土地を買って十分に利益を得るんだから
そんな綺麗なものではないだろう」

真純は、グラスに口をつけ、そして大きくため息をついた。

「父はね。今回の君と僕との関係は、その夫婦と僕の関係に似ているって言うんだ。

深入りした情のせいで、買収は成立しないんだとね」

「えっ？お父様が」

私は、テーブルから体を乗り出した。

第26話

「お父様に、私のことをお話ししたの？」

「……もうこれ以上よそう。話は終わりだ」

真純は、父親に私のことをどれだけ話したのだろうか
彼の情とはどの程度なのだろうか、
凄く知りたくて訊ねたのだが、話をはぐらかされた。
彼の心の内は、やっぱり探れない。

「分かったわ。じゃ、最後にひとつだけ。
私はね、真純さんが取った行動が間違いだったかどうかは判断でき
ない。

でもね、買収が上手くいって夫婦の生活が安定したとしても、
旅館を潰したという後悔は残ったと思うわ……だからと言って、
自らの命を絶ったという選択は間違いで、

きつとあの世でも、旅館を放棄したことを後悔しているはずよ。
だから答えはないの」

「死んでしまったらチャンスも掴めないのにね。
あなたもそう思うでしょう?」

私は、湿っぽくなった話を終わらせるため、
笑顔で真純に問いかけた。

「ああ」

真純は、私と視線を合わせることはなかったが、
真一文字に結んだ唇を緩め返事をしてくれた。
そして、グラスの中でゆらゆらと揺れる焼酎を口に流し込んだのだ
った。

あれから、私たちは買収の話をやめて
スポーツクラブ談義に花を咲かせていた。
彼がインストラクターとしてバイトをしていたときの話が面白く、
あっという間に時間は過ぎた。

「うつつ、寒いわね」

夜の11時、ほろ酔い気分を外に出てびっくりする。
外気温は随分下がっていて、コートもない軽装の私は、
ぶるぶるっと背筋が震えた。

「車なのに、いい気になって飲んでしまった。ごめん、タクシーで
送るよ」

「いいわよ。電車で帰れるわ」

「駄目だ、風邪ひくだろう。僕も帰らないといけないから。ほら、

「これ着て」

ふわりと、真純のジャケットが肩にかけられた。
檜とラベンダー……彼の香りを纏まとったような感じで、
ドキドキと胸が高鳴ってゆく。

「そして、はい……」

彼は、温かいよと言いながら腕に隙間を作ってくれたのだ。
驚く私に「こんなところに、商店街の人がいるわけじゃないでしょ」
と言いながら片目を閉じる。

「は、はい……」

なんだか、意識しまくりのぎこちない返事しか返せない。
私は、言われるまま開けられた腕に自分の手をそろりそろりと通す。
パフンと脇を締められると、密着した部分から彼の体温が伝わって
きた。

「ほんとだ、あったかい」

思わず言葉が出てしまう。

彼との密着は、私の顔まで温かくした。

どきどきどき……

なぜ、なぜ……？

心はもう大騒ぎ、大フィーバーをおこしている。

タクシーに乗り込んだ私は、今度は肩を抱かれ、
彼から引き寄せられたのだ。

運転手から、バックミラー越しに意味深な視線を投げかけられても、
真純はその手を離そうとはしなくて……。

あまりの緊張でカチンコチンに身を固めていた私であったが、

カーブに差し掛かると、その向心力に乗るように身体力をふつと抜いた。

彼の胸元に埋めた頬は、真純の身体を感じていた。

シャツの上からでも感じる胸板の厚さに、

昼間のプールで感じた裸体を思い出す。

息をする度に上下する胸とアルコールの匂いが、

夢でないことを教えてくれた。

「その角を曲がってもらって、三つ先の街灯の下で止めてください。ひとり降りますので」

あつという間に、自宅に着いた気がする。

このまま、どこか遠いところへでもドライブに行きたいと思った。

心はどきどきして苦しいけれど、彼とのふたりきりの時間が消えてしまうのは

もっと苦しかった。

「送ってくれてありがとう」

タクシーより降りた私たちは、向かい合った。

私はハッと気付き、真純のジャケットを脱ぎ手渡す。

彼の温かい手に触れると名残惜しさが増していった。

でも、もうお別れ。

「今日はスポーツもしたし、気持ちよく酔えたわ。
じゃ、来週の説明会で会いましょう。おやすみなさい」

無言のまま一途に見続ける真純の瞳に照れ笑いを返した私は、
踵を返そうとする。

だが、そんな私の腕は強引に引かれしまい、
あっという間に彼の胸に包まれた。

背中を覆う彼の腕の感触に、自分が抱かれていることを知る。
驚き彼を見ると、大きい指で顎を引き上げられ唇をふさがれた。

どくん

心臓が、ショックで止まったんじゃないかと思った。

彼の引き締まった唇が柔らかな私の唇と交差する。
彼の閉じられた瞳と長い睫毛が目の前に見え……。

彼との初キスは、まるで初恋を思い起こすような、淡く優しいキス。

私は、彼のキスに酔いしれるようにゆっくりと目を閉じたのだった。

第26話（後書き）

向心力。。。

円運動をしている物体が受ける慣性力の一。
円の中心に向かって働き、運動の速度が一定のときは物体の
質量に比例し、円の半径に反比例する。対 遠心力。

第27話

時間的には、ちょっとだったかもしれない。
でも、私にはとても長いキスに思えて……。

唇がスツと寒くなると、私はゆっくりと瞳を開けた。
真純の茶色い瞳は、街灯のせいかゆらゆらと揺れ、
切なさに溢れているようにも感じて。

「こんなに見られたら、まずいかな。
……だけど、もう少しこうしていたんだ」

真純は、私の後頭部に手を沿え、自分の胸に抱いてくれた。

商店街の人に見られても、構わない

私自身の気持ちもなんだか大胆になっているみたいで、彼の背中に手を回しワイシャツをキュッと掴む。

その行動の真意に気付いてくれたのか、真純は再び口を開いた。

「真面目に、君のこと思ってる。

卑怯かもしれないけど、こんな言い方しか今は出来ない」

それって、『真面目に好きだと思ってる』と言いたいんだよね。

仕事絡みでなくなったとき、ふたりの関係は先へと進むということよね？

私は、そう言いたくて……でも出来なくて、顔を上げ彼を見つめる
しかなく。

「だから、葉子さん……今日のキス覚えてて。僕の気持ちだ」

嗚呼。

凄いと心が感嘆の声をあげていた。

この言葉で、彼から想われている事をはっきり確信したのだ。ブライベートと仕事絡み合うことを極端に恐れる彼、その彼が表してくれたこの言葉だけで、私は満足だった。

「忘れないわ」

私の返事に、恥ずかしそうにくしゃっと顔を崩した真純は、名残惜しそうに頬と頬をくっ付けるときゅっと私を抱きしめる。

そして、私たちは別れた。

家に帰ってから、私は化粧も落とさず唇に触れていた。
真純とのキスの感触が、まだリアルに思い出せる。

『このキスを忘れない……忘れたくない……』

私は、そう心に言い聞かせていた。

私は、幸せの絶頂だった。

その絶頂が一変するなんて、この時は考えもしなかった。

第28話

今日は、説明会の日。

私は朝から念入りに化粧をして、洋服を考える。

まるでデートのようなワクワクした気分、一体何年振りだろう。

だが、そんな浮かれた気分は、

雲雀すずめのような訪問者によって邪魔されてしまったのだ。

「ちょっと！葉子」

詩織がけたたましい声を上げながら、家へ入って来た。

なによと言いながら、私は候補の洋服を身に当て鏡を覗き込む。

「あなた！副社長と抱き合ってたんだって！」

「へっ？」

私は変な返事をする、鏡に映る詩織を見た。

ふたりの立場上、親友の詩織にも真純と食事に行つてタクシーで送つてもらつたまでしか言つてなく……なのに、どうして？

「あんだ、土地の買収を受けたの？それはいいけど、商店街ではとんでもない噂になつてゐるわよ。」

恩田と葉子ができていて、羽並の土地だけ他の倍の値で買収されるつてね」

「うそ……。誰がそんな」

私は、詩織に包み隠さず話しをした。

内緒にしたことを詫びるが、彼女もその理由を分かってくれたようで咎めることはしなかつた。

詩織曰く、商店街の人に私たちの姿を見られたようで、噂は尾ひれが付き、広まり続けているのだという。

「噂好きだからね。あの人たちは」

噂の出所を、詩織は知っていた。

私たちを見つけたのは、3軒隣の土地所有者。

自営していた店が潰れてからギャンブルに狂い、

親戚中にお金を借りまくった挙句、

自分の子供の学費や給食費にも手をつけていることで有名な人である。

そして、その人に入れ知恵を働いたのは、

今でも関わりがある商店街の店主の会の数人だったのだ。

「不味いところ見られたわね。多分、今日の説明会で攻撃されて
値が吊り上げられるわよ」

「そんな……嘘なのに」

「お金が絡むと人格は変わるのよ。商店街の人だって、
土地をもっと高く売りたいわけでしょう。どんな手段でも使っわ」

なんだかとても悲しくなった。

今まで、一緒に苦難を共にしてきた人たちなのに、
そんな嘘っぱちな噂を流して心が痛まなかったのだろうか？
真純が、仕事とプライベートに苦悩する意味がようやく分かった気がする。

私は、胸に当てていた洋服をギュッと握っていた。

「そんなこと、絶対させないわ」

「って、言ったってどうするのよ」

私は、今まで当てていたお洒落な服をやめ、パリッと糊が利いたダークブラウンのスーツを選んだ。それは、私の決心を表すものであった。

商店街外れのビルの3階会議場を貸しきった部屋には、予想より多くの関係者が座っていた。

私は、その中に入り、多美子の横へ座る。

周りから刺されるような視線を感じると、

噂が随分広がっていることを知り、憤りを感じた。

噂も流した本人たちも来ていて、こっちを見ながら笑ってる。それで、意思は固まった。

「詩織から聞いたわよ。いいの……あいつから誤解されても」

こっそりと囁く多美子の言うあいつとは、真純のこと。

室内の前方に見えるテーブルには、

3本の飲料水入りのペットボトルとコップ、

中央の椅子には彼がいつも持ち歩いている

本皮のダレスバッグが置かれていた。

私は、切なげに彼の席を見つめたまま言った。

「構いません。私たちのことを、取り引きの材料になんかにさせない」

多美子の同情に似た視線を感じても、私の気持ちは変わるはずはなかった。

無機質な時計が16時を指し、
副社長を先頭にFIE関係者が入ってくる。
真純の姿を見た私は、スーツの襟を直し、彼をキッと睨みつけた。

「本日はお忙しい中、説明会に足を運んでいただきありがとうございます。
います。」

まずは、課長より本日の説明会の流れをお伝えし、
その後、わたくし恩田から詳細を説明します」

まずは、資料を配られる。
すると、商店街関係者がざわざわと話し始めた。

「ちょっと資料見て！このFIEの駐車場一階は、
あの大手のスーパーマーケット『レオン』が入るのね。
うちの魚屋をそこに入れてくれるなんて驚きだわ……あつ、ごめん
葉子」

「いいえ、おばさん。無理しなくてもいいんです。私に構わず、おばさんに合う条件だったら買収を受けてもらっていいんですよ」

真純の言葉通り、資料に記載されているFIE見取り図には、店舗のスペースと大手のスーパーマーケットのスペースが入っていた。

君の花屋はここ。

もちろん店名など明記されてはいないが、一階に彼の言った店舗スペースが作られていた。

彼が出した計画は、店を構える者構えない者、商店街の誰もが納得できる構想となっている。本当に、彼は救世主なのかもしれない。

その彼を歪んだ噂で、傷つけたくなかなかつた。

「それでは、恩田副社長より土地開発の構想を資料に沿って説明させていただきます」

「では、資料の2ページ目を……」

「ちょっと、恩田さん」

彼の話を折るように、私は立ち上がった。全ての視線が自分に向いたのが分かった。

「あなたなの？私が羽並の土地買収に応じたって噂を流した人は」

真純にとっては、寝耳に水。

こないだと違う私の態度に驚いているようで、彼の瞳は大きく開けられ動揺を隠せないようすである。

「羽並様へは、まだご案内をさせていただいてる途中ではありませんか？
プライバシーに触れることですので、買収したか否かは私どもの話すことはありません。何か誤解されておられるのでは？」

もちろん、この返事が返ることぐらい分かっている。私は、真純の言葉に気分を害した演技をした。

「あなたが言わないで誰が言うのよ！
私の土地は祖母と母が守ってきた大切なものなの。
あなたが、色仕掛けで来ようが何しようが売るつもりは全くないわ！
私はそれだけを言いに来たの！何度来たって無駄なものは無駄。
じゃ、私は失礼するわ」

「羽並様、誤解です。私どもは本当に！」

心を鬼にする。

彼の言葉を見無視し、私は薄ら笑いを浮かべた。

「土地買収って、結局はのっとり屋じゃないの。
そんなこと平気で出来る人なら噂を流すなんて朝飯前……」

ざわざわと会場がざわめき始めた。

噂を広げていった商店街の人たちの慌てている姿が見えるようだ。
ひとりでも買収が上手くゆかなければ、この話は消滅する。
彼らはそれを分かっているのだ。

もちろん、ほとぼりが冷めれば説明会にも来て検討するつもり。
だけど、今は噂を流したことを後悔すればいい、
心を痛めればいい、私は彼らに心で訴えた。

「でしょ？」

真純の瞳が、きつくなるのが分かる。

私は、彼を睨むと踵を返す。

心の中では、なんどもなんども謝っていた。

第29話(前書き)

第29話

陽が落ちてからのこと。

昼間と同じスーツ姿にコートを羽織った真純が、私の元を訪れた。会議場で見たFIEのスタッフとともに。

「どうぞ。お茶を入れます」

私は、ふたりに部屋に上がるよう勧めたが、真純はスタッフを店に残した。

「すぐに帰るから、お茶はいらないよ」

そう言いながら、真純はコートを脱ぎ、小さなコタツに入った。初めての彼の自宅訪問だと思うと、心臓はドキドキ落ち着かない。そんな、気持ちのまま私も向かい側に座った。

「辛い役をさせてしまったね」

彼が、私の態度の理由を知ったのだと思うと、胸がぐつと苦しくなる。

「突然あんなことを言い出して驚いたけど、理由は魚住さんから聞いた。」

申し訳ないことしたよ。立場をわきまえず、君に迷惑をかけたな」

私は、慌てて迷惑なんてかかってないと返した。

「私はただ、プライベートを取引の材料にしようとした一部の商店街の人たちが許せなかったの。」

その人たちを懲らしめるためには、あんな風に言っしかなくて……」

「ああ、分かってる。悪魔、冷血人間、のっとり屋、言われ慣れたるさ」

暢気にクスクス笑う真純に頬を膨らませた私は、『口が悪くて、悪かったわね』と言いながら、

彼の肩を叩こうとして手を止める。
彼と視線が交わると、私は視線を避け手を下ろした。

「こんなことも誤解されるのね」

「そうだな」

真純は苦笑しながら、ダレスバッグより資料を出し
私に手渡した。

「ということで、今後の交渉は、
さつき君が会った課長にしてもらうことにした。
会社の中で一番僕に考えが近い人だから、君も話しやすいと思う」

206

こんなに近くにいるのに、ふたりの間に大きな溝が現れたような気がした。
そういう状況に追い込んだのは自分自身であり
仕方のないことだと分かっている。

「こうなった以上、もう一緒にはいられないというわけね」

「ああ、そうだ」

気まずい雰囲気、肌寒い部屋の中に充満する。

「と言っても、僕は来週から海外に行くんだ」

「えっ、遊びに？」

真純は、違つよと言いながら、仕事に行くんだと話した。

「ちょっとロサンゼルスまで。」

向こうにうちのクラブを建てることになってね。ちょっと下見に」

それって、もしかして。凄くいやな予感がした。

上目遣いに彼を見つめながら、私は小さく呟いた。

「………この買収が終わったら、ロスに行くってこと？」

「そつだな。そうなると思う。深入りし過ぎだと

社長から言われてるから、海外に追いやられる形になるかな」

「そつなんだ」

とても、心寂しくなった。

彼は、ずっとこの土地にいてくれると思ったが
そうではなかったのだ。

真純にとってこの土地は、渡り鳥で言う休憩地。

きっと、彼との恋愛は深まる前に自然消滅してしまうのだろう。
だったら、ふたりの関係が曖昧で良かったのかもしれない
……そう思うしかなかった。

「じゃ、そろそろ行くよ。課長と話して納得いく答えを出して」

真純は、コートを手にとると立ち上がる。

「ねえ……」

未練タラタラな私は、思わず声をかけた。

クリスマスは、何してるの？

2週間後のクリスマス。そして、彼の誕生日。

彼の居場所だけでも聞きたかった。

……。ただ……。

「葉子お〜！FIEのおじさんが店の中にいるわよ……あれ？真純君もいたんだ」

半分開いた店のシャッターを潜って入ってきた詩織が、顔を覗かせる。

私は、喉まで出ていた言葉をグツと飲み込んだ。

「おや、こんばんは、詩織さん。ますます職業婦人になって、今日のスーツ姿もかっこいいですね」

「それって、嫌味？しっしっ、もう帰りなさい。また葉子に虫がついたって噂されるわよ」

「虫扱いか、失礼だな。さあさあ、踏まれないうちに帰らないとね」

「ひどいわね！」

詩織から肩をポンと叩かれ楽しそうに笑った真純は、私と詩織に手を上げ帰っていった。

結局、真純に何も言えないまま別れてしまった。

私は、シャツターを下げる詩織の背中を見つめた。
あんな気さくに接することが出来る詩織が羨ましかった。
土地絡みでなかったら、こんなに砕けて話せるのだ。
どんなことをしようが、どんな関係になろうが、
何も言われることはないのだ。

違う形で彼と出会っていたら……
違う展開が待っていたかもしれない。

私が背負う物、私は初めて重荷に感じた。

「ねえ……葉子」

詩織が、私を呼んだ。

「なに？」

「真純君の香り。GUCCIのrushなのね。やっと分かったわ」

「ラッシュ？」

「元彼が使っていたフレグランスと一緒になの。メンズ用よ。すごく懐かしい」

詩織は、私に背中を向けたまま
想いにふけるように真純が残した香りをすうっと嗅いだ。

私も、詩織が言った真純のラッシュを鼻腔に呼び寄せてみた。
香りのせいで彼とのキスを思い出してしまう。
きゅんと心が泣いていた。

第29話（後書き）

G U C C I r u s h f o r m e n . . .

あのG U C C Iの男性用フレグランス。現在は廃盤で手に入らない
そうです。一度香ってみたかった。。（笑）

第30話

元彼が使っていたフレグランスと一緒になの。

G U C C I r u s h f o r m e n .

クローゼットにかかるベージュのカットソーを取り出した私は、その布地にそつと頬を寄せていた。詩織の言った真純のフレグランス。未だにその香りが残るこの服は、彼とのキスのときにきていたものだ。

時間も経ち、ほとんど幻臭に近いのかもしれないけど、彼を感じたくて、どうしてもこの服を洗うことはできなかった。

その後、はなみ花屋の土地買収は、FIEの課長と名乗る人が担当になった。

人柄が良く、疑問に感じるところも噛み砕いた言葉で説明してくれる年上の彼は、真純とは正反対な穏やかで恰幅のよい男性。そんな課長に慣れた頃、雑談の中でそれとなく真純のスケジュールに探りを入れてみたが、教えてはくれなかった。

『すみません。羽並さんとは副社長の話をすると言われてるんです』

その言葉で、彼は私とのプライベートな関係を断とうとしているんだと理解した。

商店街の噂は、あの説明会をきっかけにピタリと収まった。だから、彼との関係も復活するかと淡い期待をしていたのだ。そんな考えは甘すぎるのだと、身をもって知らされた気がした。

彼と会いたい。

諦めきれない想いに悩まされながら、
無情に時間ときは過ぎていくだけであった。

私は、クローゼットを閉めると店に出た。

巷は、クリスマスイブ。

この寂しい商店街も、その甘い雰囲気を味わうため、
通りのあちこちにクリスマスイルミネーションが施されていた。

私は、身を切られるような寒さの中

小さなクリスマスツリーを店先に飾り、思うままに花を選び出す。

真純に花束を作り始めて以来、まるで泉が湧き出るように

花のアレンジが浮かんで仕方がなかったのだが、

彼が来ないとそのアレンジは、ただの幻想へと変わっていた。

創造の欲求を鎮めるため、そして、むしろくしゃした気持ちを落ち着かせるために
久し振りに花束を作ってみることにしたのだ。

本当に守らなければならぬものを見失っている。

花に触れていると、真純が言ったこの言葉が脳裏に浮かぶ。
彼は、その答えを知っていたのだろうか、
結局その答えを教えてもらうことは出来なかった。
この土地でなければ、花屋の看板でなければ、
それ以外に何を守るのだと言うのか……。

「じんにちは。花屋さん」

夢中だった私は、突然現れた男性を真純かと思いきりとした。

だが、それは彼ではなく、最近挨拶してくれるようになった
中年のサラリーマンで。

「よかったです。その花買わせてくれませんか？」

「え？」

あと、紐組みをつけるだけの花束。

真純のことを想い作ったこの花束を指している事に、すぐに気が付
いた。

「その花束がっこいいですね。」

私たち男性でも自然に持てそうだなと思って、買えますか？」

「も、もちろんです。ちょっとお高いかもしれませんが……」

真純仕様だから、いい物を使っている。

もちろん見た感じは、いかにも花束というのを避けた感じだ。

薔薇アバランチエ ダリア黒蝶 アンスリウムテラ

スプレーカーネーションガナツシユ ゲイラックス コウリヤン
などを使ったウェディングブーケ風の花束である。

ちょっとサラリーマンには、手が出なさそうな値段。でも、いらなと言われたらそれでいいかと思った。

「7000円になりますが」

「あ、いいですよ。奮発します。今日は結婚記念日なもので、早く仕事を切り上げて食事に行くんです。本当にいい花束だ」

「凄い、イブに結婚記念日なんですね！素敵……おめでとうござい
ます！

この花のアレンジは、ウエディングブーケをイメージして創ったんです。

記念日のお手伝いが出来るとても嬉しいです」

「ありがとうございまして！」

本当に、男性は花束を買って帰っていった。

いつも、背中を丸め自信なさ気に歩くあの中年サラリーマンが、今日は胸を張り、花束のかっこよさに負けなくらい自信に溢れている。

なんだかその姿を見た私は、嬉しくてたまらなかった。

自分の作品を認めてくれたこと、技術的にいいものだったら高くても買ってくれろということをおぼろげに知らされた。

もしかしたら、彼はこのことを言っていたのかもしれない。本当に守らなければいけないものは土地でも看板でもなく、私が代々受け継いできたこの技術だと。

だから、彼はこの店と共に潰れゆく私を心配し続けていたのだ。

『土地買収って、結局はのっとり屋じゃないの。』

そんなこと平気で出来る人なら噂を流すなんて朝飯前……でしょ？』

私は、説明会で言ってしまった言葉に後悔していた。

私の技術、私自身を認めてくれている彼に、あんな状況だったとしても人として最低のことを言ってしまったのだ。

出来るのなら、もう一度会って謝りたかった。

そして、ひと言彼に言いたかった。

『うちの土地を地域の役に立てて……』。

そして、はなみ花屋をFIEEの窓口に置かせて欲しい……』と。

私は、土地買収を母に伝えることを決心した。

第31話

「調子がいいから、退院させて下さいって頼んだのだけど……。
ここの医者は、心配性なんだから」

母は真純と話をした後から、退院を目標に頑張っている。
昔していた泳ぎを始めたいと言い、
元気になったら真純のスポーツクラブに通うんだとの進歩。
彼には、いろんなことで助けてもらってる気がする。
本当に感謝だ。

「ねえ、お母さん……」

「あつ、葉子。あの写真持って来てくれた？」

「あ、うん」

私は買収の話を持ち出せないまま、母から頼まれたアルバムを手渡した。

それは、白黒の色褪せた写真。

はなみ花屋の創業時代の写真が入ったアルバムだった。

私も、久し振りに見るような気がする。

もう、何十年も昔のはなみ花屋。

店の概観は今と全然変わらないが、

隣人や常連さんに囲まれて、祖母が幸せそうに笑っていた。

「これはね。塩崎さんが写してくれたんだって。

この当時はね、カメラを持っている人なんて、本当のお金持ちだったのよ。

ほら、葉子見える。奥の自宅が今と違うでしょう。

今の自宅は、私がここに来て建て直したの。

もちろんお金がなかったから、

掘っ立て小屋みたいなものしか造れなかったんだけどね」

母は、懐かしさを味わうように写真を見つめている。

「でもね、まだおばあちゃんが亡くなる前だったかしら、買収の話が出たのよ」

「土地の？」

そんな事、私は初耳だった。

「それで？」

「その時は、商店街に陰りが出てきた頃でね。頭のよい経営者数人は、その話に乗ったわ」

「うちは？」

「おばあちゃんが、買収に反対したのよ。何もないところから始めたお店だもんね。

その大切さが分からなくて、あの頃、随分喧嘩したわ」

「そうだったんだ……」

私は、呟いていた。

おばあちゃんの思いを考えると、買収を受けるなどと言い出せなくなりそうだ。

「だけど、あの時売っておけば、今、お金でこんなに苦労することはなかったのよ」

「ねえ、おかあさん？」

今が、チャンスだと思った。

私は、母を呼ぶ。

だが、それは他の患者の来室で遮られる事となった。

「羽並さん、あら娘さん来てたのね」

「こんにちは」

一番いいところで割り込まれて、私は、苦笑しながら会釈する。
彼女はベッドサイドの椅子にドンと座ると話し始めた。

「土地売るの？」

中年女性の彼女は、しっかり私たちの話を聞いていたみたいで。

「違つのよ。昔の話」

「そうよね。羽並さんところは、駅前で凄く立地がいいんですよ。
売るなんて駄目よ。今は景気が悪いかもしれないけど、

いつ回復するか分からないだし。
それに、長年住み慣れた我が家を盗られるのは、
私たち年寄りには辛い話よ……ねえ、娘さん。あなただってそう思
うでしょ」

「は、はあ……」

その女性は、ほとんどひとりで話している。

彼女の土地も昔買収されたようで、今度はその話を始めた。
買収した不動産の悪行振りを懇々と言い聞かせた後、
土地を明け渡したことを未だに後悔していると話した。

「どこの会社も馬鹿みたいに安く買って、儲けることしか頭にない
奴らよ。
だから、売らずに持つてるのが一番なの。
経験者が言うんだから間違いなしだわ」

母は、その話を興味深げに聞いていた。
彼女の話が全て終わると笑いながらこう言った。

「うちは、娘が売らないみたいだから。大丈夫よ」

そのつもりだったんだけど、おかあさん……。でも、状況が違ってきたのよ。

私は心の中でそう叫んでいたが、もちろん伝わるはずはなかった。

結局、私はひと言も母と話せないまま、病院を出た。

あの患者との話が終わったかと思ったら、

点滴だ処置だと看護婦やドクターが代わる代わる入ってきて、二人っきりになれなかったのだ。

次回のFIE説明会は、来年。

母とは正月外泊の際に、誰にも邪魔されない環境で話すしかなかった。

外気温は、更に下がっているようだ。

大手百貨店が立ち並び、

建物の隙間から覗く今にも泣き出しそうな空を見上げた私は、大きなため息をついた。

第32話

母が入院している病院は、自宅からふた駅の有名百貨店が軒を連ねる大通りの一角にある。

私は病院を後にし、いつものようにウインドショッピングを楽しむと百貨店の中にあるカフェに入った。

一番安い珈琲を頼み、ガラス張りのカウンター席へと座る。

大きなガラス窓の向こうには一流ブランドショップがズラリと並んでいるためか、

通る人はいかにも高そうなコートや毛皮を羽織り、手にはショッピングのロゴが書かれた袋を持っている人ばかり。

私は、芯から冷え切った身体を温めるため、息を吹きかけながら熱い珈琲を口に含んだ。そして、通りゆく人々をジッと観察する。

ほとんどは恋人連れか家族連れ、

後数時間で訪れるクリスマスに心弾ませているようにも見えた。

いいなあ。

急に、寂しさがこみ上げた。

慣れているとはいえ、こんな暖かな世界を目の前で見てしまうと羨ましくて仕方がなかったのだ。

真純とふたりで歩く図が、頭の中に次々と湧き出てくる。
空しい空想……頭を振り消した。

私は、カップを手に取り、

またぼんやりとガラスの向こうの世界に視線を向けた。

そして、ちょっと厚みのある紙カップに口をつけようとして止めた。

瞳はある女性に釘付けとなったのだ。

彼女が持つ袋……。

それは、GUCCIと書かれたペーパーバッグであった。

真純の使っている香水と同じブランド。

同時に、脳の記憶が開放されたかのように、彼のフレグランスの香りが蘇る。

まるで走馬灯のように、

彼とのキスシーンが頭を駆け巡り、胸を熱くした。

気持ちは急いた。
軽い火傷でぴりぴりする喉に珈琲を全て流し込み、カフェを出た。
そして、私は強力な磁石で引き寄せられるように、
GUCCIのショップへと向かったのだった。

私は生まれてこのかた、ブランド品を身につけたこともないし、
もちろんそういってお店にも入ったこともない。

百貨店の一階にずらりと並ぶ高級ブランドのお店を見て、ちょっと
ひいてしまった。
どこの店も上品な雰囲気漂っていて、
ショーウィンドウには、バッグや腕時計、靴などが並んでいる。
その値段は、一瞬では分からないような値段……、十単位や百単位
のものまで。

だけど、あのフレグランスくらいだったら
誕生日プレゼントとして渡せるかもしれないと思った。

駄目だとしても自分で香りを楽しむことも出来るじゃないかと、でも。

ど、どうしよう……入りにくい。

まさかこんな展開になるとは思わなかった私は、
恐る恐るシヨウウィンドウのガラスで自分の姿を確認した。

「ああ」

思わずため息をついてしまった。
一点の曇りもないくらいに磨かれたガラスには、
数年前のバーゲンで買ったファー付きのブルゾンジャケット、
ニットのセーターにジーンズスタイルというカジュアルな格好の女性
性が映っていたのだ。

そう、それは紛れもない私の現実の姿。

カジュアルしすぎて、入店拒否でもされるんじゃないかと不安になった。

こんなことだったら、
もうちょっとお洒落な服を着てくれればよかったと後悔した。

「いらっしゃいませ」

店の前で立ち往生する私に気が着いた女性店員が、落ち着いた声を上げた。

目が合うと、にこりと笑いかける。

「何かお探しですか？」

後戻りも出来ず、私も笑い返してみた。

「どうぞ、店内もご覧になって下さい」

きつと、庶民の入り辛さが分かるのだろう。

彼女は、微笑みかけながらそう言ってくれた。

買えないなら出ればいい、そう言い聞かせながら店に入ってみる。
店に入ってみると、数組の若いカップルがいたのでちょっと安心した。

「あの……、男性用のフレグランスで

ラッシュフォーメンというのがありますか？」

まるでモデルのような容姿で、髪をきつちりとあげた店員さんが、笑顔を向けながら接してくれた。でも、商品名を聞いた彼女は、途端に残念そうな表情に変わったのだ。

「そちらの商品でしたら、廃盤になりました」

現在こちらでは取り扱っておりません。申し訳ございません」

「え、廃盤？」

ないと思うと無性に欲しくなるのは私の性格の歪みだろうか？

「どこに行ってももう無いのですか？」

その女性店員は、廃盤と言うことを聞いた愛好者たちが元々希少だったものを買いあさり、ネット上でも売り切れが続いているのだと言った。

「ラッシュフォーメンはございません。

プレゼントでしたら、香りは違いますが

こちらの商品も男性に人気の商品でございます」

彼女が掌に乗るくらいの香水を持ってきて、見せてくれた。だが、それでは意味がなかった。

それじゃ、真純に渡せないどころか、彼を感じるという変態チックな事さえも出来ないのだ。

でも、廃盤ではどうしようもなかった。

「そうですね……。また改めて出直してきます」

私は、仕方なく諦めることにした。

だが……。

「何、平井。ラッシュを探している人がいるの？」

踵を返そうとした瞬間、突然聞きなれた声が私の背後から聞こえて

きて

振り向くとそこには真純がいた。

黒のロングコートを着て、襟元にはワインレッドのネクタイがチラリと見える。

夢ではなかった。

「あれっ？葉子さんじゃないか。何、君ラッシュを探してるの？プレゼント」

「ま、真純さん」

まずい、妄想の張本人と出会ってしまった。

どうしよう、なんて言ったらいい？こっぴつときは。

「お、叔父にあげるの」

咄嗟に嘘をついてしまった。

もちろん、母も父も一人っ子で叔父なんていない。

さすがの真純でも、私の親の兄弟まで調べていることはないと思っ
た。

「あ、そう。じゃ、平井。僕の分彼女にあげて」

「いいの？真純。たぶんもつどんなコネ使っても手に入らないわよ」

「構わないさ。包んであげて」

有頂天で気付かなかったが、どうやらこのふたりは知り合いらしい。それも結構いい雰囲気、美男美女のカップルそう言っても違和感はなかった。

「それではお客さま、中のお部屋へ案内いたします」

「あ…あの…ちょっと待ってください。それはおいくらなのです
か」

ずっとずっといつ言おうと構えていた言葉。

あああ、恥ずかしい。貧乏丸出しである。

それも彼の前で……穴があったら入りたい気持ちになった。

「6500円でいきます」

セーフ！買える。よかった。買えるんだ。

帰りの電車賃を残しなんとか足りたと安堵した。

「大丈夫？ なんだつたら僕が」

「いいんです！ 買えます」

つい声を荒げてしまったが、

プレゼントなのに彼に買わせる訳にはいかなかった。

だが、真純は言葉を荒げる私にあきれることなく、

叔父さんは葉子さんに好かれていているんだなと笑みを返してくれた。

「またのご来店をお待ちしています。ご健闘をお祈りしています」

私にGUCCIのペーパーバッグを手渡した平井は、こっそり耳打ちした。

きっと彼女の勤が働いて、このラッシュを真純に渡すことに気付いたのだらう。

真純のためのラッシュフォーメンをやっと手に入れた。

まだ店内に残る彼のが気になりながらも、

彼を待ち、ぼうつと立ち尽くすわけにはいかずショップを出ることにした。

私は、さっき立ち寄ったカフェを通り過ぎる。

すると、あとから追いかけてきた真純から声をかけられた。

「ちょっと待って、葉子さん。」

外は雪が降ってるんだけど、傘は持ってきてるの？」

「えっ！雪？」

私は、急いで玄関まで出た。

そこはボタン雪が降り続き、街中が真っ白な銀世界となっていた。

「うそ……」

「電車も止まってるし、タクシーも捕まらない。
文字通りホワイトクリスマスになりそうだ」

「えーっ、帰れないじゃない」

確かに今日は寒かった。

きつと、カフェに寄った後から雪が降り出したのだろう。

『ホワイトクリスマス』

恋人たちにはロマンティックなものかもしれないが、私にとっては
迷惑なだけ。

地下鉄だって、うちの商店街までは通っていないし、
歩けばゆうに1時間以上はかかると思うと、途方に暮れるしかなか

った。

だが、そんな私の焦りを無視し彼は、肩を叩いたのだ。

「まつ、いいじゃない。ご飯食べたの？」

何か腹ごしらえしないと凍死するよ。行こう」

悠長に彼は何を言い出すのだろうか、

プライベートな関係は避けたいんじゃないのか？心が問いかける。

「ち、ちよつと真純さん」

「えっ？もしかして叔父さんとデート」

彼は本気でそう思っているようで、怪しげな視線を投げかけた。

「違うわよ」

「あ、そう。じゃ行こう」

すぐ、彼のペースに巻き込まれてしまう……。

でも、本当にこんなふたりの場面を作ってもいいのだろうか。

私はそう思いながら握られた腕、そして、彼の背中を見た。

だが、彼は私の気持ちなどお構い無しに歩き始めた。

結局、振り解くことも出来ずに真純にぐいぐいと腕を引っ張られな

がら、
百貨店を後にした。

第33話

「ち、ちょっと、何ここホテルじゃない！」

ここまで来る途中、彼は携帯からいくつかの店に電話をした。だが、クリスマススイブということと、この大雪でどこも客がいっぱい。

……で、連れて来られたのがこの超有名ホテル。驚いた私は、足かせをつけられたように動けなくなってしまった。

「このレストランもいっぱいだね。だから、スイートを取った」

ホテルのレストランどころか、スイートルームだという。金銭感覚が違いすぎる。

どうして、レストランが空いてなくてスイートルームなの？
そっ心で突っ込みを入れながらミクロの細胞になって、

彼の頭の中に入れてみたくなった。

きっと彼の頭の中には、新種の細胞がウヨウヨしているに違いない。

平凡人には思いもつかない発想で、私は呆れ返っていた。

「…の方が、确实でしょう。こんな雪の中

いろんなところに連れ回して風邪ひかせるより、

暖かいし、食事は旨いし、部屋なら誰にも邪魔されないし」

でも、スイートとはゴージャスな寝室がある場所。

ふたりきりで食事して、隣は寝室。

恋人でない私をそんな所に連れて行っていいわけ？

……と、心の中でおたおたしても、彼に通じるはずもなく。

「ほら、来て。いつまでも外にいたら雪だるまになるよ」

ふと気付くと、彼の頭や肩には雪がうつすらと積もっていた。

私がモジモジし続けこの場に留まれば、じきにふたりとも雪だるま
だ。

潔く覚悟を決めるしかなかった。

「そ、そうね」

私はキョロキョロと辺りをつかがいながら、彼の隣に付き
ホテルロビーへと入った。

「いらっしゃいませ。お待ちしておりました、恩田様」

フロントで名を名乗ったときから、あきらかに従業員の態度が変わった。

真純は、客は客でも上お得意様のような待遇。

最高の待遇になるくらい誰を連れてきたのだろうか。

そして、私たちは支配人より案内されて、最上階のスイートルームに入る。

生まれて初めて足を踏み入れた部屋。

私は西洋の置物がズラリと置いてあるようなイメージを浮かべていたけれど、

実際見る部屋はシンプルで広々としていて。

だけど、絨毯にしるテレビにしる、飾られているグラスにしる、

全ての調度品は、見るからに高級なものが揃えてあるように思える。

私は、靴を脱ぎ絨毯の上上がるうとした。

それを、真純は止めた。

「葉子さん、土足でいいんだよ」

「うそっ……」

私は慌ててパンプスを履きなおす。

真純が笑いを堪え肩を揺する横で私は、顔から火が出るような思いをしていた。

貧乏人の発想にしか思えず、恥ずかしくてたまらない。

真純は、一歩前を歩きながらコートを脱ぎ

当たり前のようにホテルマンへ手渡す。

私もすみませんと恐縮しながらジャケットを手渡した。

「もうすぐ準備が整いますので、暫くお待ちくださいませ」

「すまない支配人、無理言っ」

「いいえ、ちょうどスイートに泊まる予定の

お客さまのキャンセルが入ったばかりでしたので」

「この雪で？」

「はい」

「まだ降り続くのかな？」

「夜半までは止まないようです」

支配人と真純は、親しいようすで話をしていた。

その間、私はもうひとりのホテルマンに化粧室の場所を聞き誘導してもらった。

「うん」

私は緊張をほぐすため大きな伸びをし、化粧台の鏡を覗き込んだ。とれかかった化粧にがっかりしながら、唇に紅を塗る。

一通り済むと真純へプレゼントを渡す構図をいろいろと考えてみた。

「はい、真純さん。25歳の誕生日おめでとう!」

にっこりと微笑み、鏡に向かってペーパーバッグを差し出す。

『これは叔父さんのじゃないの?』

私の言葉を聞いた真純の台詞は、きつとこつだ。

「実は、あなたのために買ったのよ。あげるわ」

『僕はGUCCIより、君の身体が欲しい』……じゃなくて

『ありがとう。僕にくれるの?』

「ええ、あなたに会えてよかった。私あなたのことが好きなの」

『僕もだ……。葉子』

「真純さん……」

ああ、駄目だ。

場所が場所だけに妄想はすぐに飛躍し、エッチな方へと進んでゆく。

私は、いかがわしい妄想を消そうと頬をパチパチと叩く。

するとドアをノックする音が聞こえ、真純が顔をのぞかせた。

「葉子さん、もう前菜来てるんだけど。顔叩いてなにやってるの?」

「な、なんでもないわ」

「じゃ、食べようよ。ワインも飲むでしょう?」

結局イメージトレーニングは、中途半端に終わってしまった。
私は、バッグを持つと真純の後を追った。

リビングに設けられたお洒落なテーブルに座らされると、
真純はウエーターにワインを頼んだ。
私は、緊張する。

彼とこうやって真向かいに座り、見つめ合っていることに。

「ロスから帰って来たんだ」

ようやく話題をみつけて、彼に問うてみた。

「ああ、朝こっちについてFIEにいたよ。
もう時差ぼけでね、仕事にならなかつた」

「そう、大変なのね」

「まあね」

話が途切れる。

場がシンと静かになり心が高鳴り始めると、懸命に話題を探した。

「あ…あなたは、今日予定があつたんじゃないの？」

「えっ、どうして？」

「だって、今日はイブでしょ……その……」

「どうして、こんな日に恋人と一緒にいないのかということ？」

話題がないからといって、どうしてこんなことを聞いてしまったの
だろう。

探りを入れていることがバレバレだ。

『この後、予定があるんだ』なんて言われたら、おしまいなのに。

「恋人か……」

彼はそう呟くと、ソムリエから注いでもらったワインを光に翳している。

ゆらゆらと赤い液体を揺らしたあと、同じワインを私に注ぐように指示した。

「そう言えば去年のイブは、平井と過ごしていたな」

や、やっぱり。いいムードを漂わせていたさっきの店員さんだ。彼らは恋人同士だったんだ。

「平井…って、グッチの店員さんよね」

「ああ……、まっ、とにかくまずは乾杯しないか」

私の質問攻めに苦笑しながら、真純は話題を変えた。

「ふたりのイブに乾杯」

彼は、そんな台詞を口にした。

第34話

ほんわりとした雰囲気、温かな空間。

テーブルにセツティングされた蠟燭がゆらゆらとオレンジ色の光を見せ、

クリスマスの雰囲気を盛り上げてくれる。

窓の外は相変わらず真綿のような雪が降り続いていて、

そして、目の前には、穏やかな表情をした真純がいた。

どきどきどきどき……。。

心臓は、張り裂けんばかりの速度で拍動している。

シェフお勧めのイタリアンは超絶品のはずなのに、

ほとんど味が分からないくらいに私は緊張していた。

掌は汗でびっしょり、何度パスタフォークを落としそうになったことか。

『だから、葉子さん……今日のキス覚えてて。僕の気持ちだ』

パスタを口に運ぶ彼の唇に視線が引き寄せられ、
あの日のキスを思い出してしまふ。

あの日がキスなら、今日は、恋愛の階段を
ひとつ上がったたりして……なんて、
よからぬ考えにたどり着いた。

ありえない期待感は、妄想とともに膨らんで止まらない。
ようやく気付いた彼の視線に気恥ずかしくなりながらも、
そ知らぬ振りしてフォークを口に持ってゆく。

だが、目の前のフォークにパスタを巻いていなかった事に気付いた
私は、
恥ずかしくなって俯いた。

「葉子さんは、僕の恋愛話に興味があるの？」

「いえ、別に興味があるっていうわけじゃないけど」

本当は凄く興味があるのに、興味なさげに答える。

でも、あの平井という店員との関係は知りたかった。

そんな私の気持ちを知ってるみたいに、真純は話を始めた。

「僕の初恋は、小学三年生、初めて彼女が出来たのは中学のときだ。

それからクリスマスに寂しい思いをしたことはなかったよ。ただ、FIEに就職してからは特定の人と長く続くことはなかった。

さっきの平井もそうなんだけど、僕は仕事柄1ヶ所に滞在することが出来ないから、女性に寂しい思いをさせて振られてばかりだった」

意外に真純の恋愛は、寂しいものだったのかもしれない。

「それって、遠距離恋愛という事でしょう？」

「ああ、それに近いものはあったかな、1年に数回会えたらラッキーという感じ。どう？葉子さんだったらそんな恋人は嫌？」

唐突に真純は私に振ってきた。

まるつきり予想もしていなかった質問に、私の思考回路はオーバーヒート寸前となった。

「え……、私は……」

膝に下ろした手を、ギュツと握る。

彼が恋人だったなら、私は……。

私は、目の前に座る真純をじっと見つめていた。

会社のために仕事をしている彼には大きな目的がある。だから、遠距離になっても、たとえ寂しくても気持ちには変わらない……と思う。

「私を愛してくれているなら、いつまでも待てる。寂しくても、真純さんの声さえ聞けたらそれで十分よ。私を中心に考えて仕事がおろそかになるほうが嫌いだよ」

「へえ……」

真純は、意味深な相槌を打ったあと豪快に笑った。

『なんだか職人肌の葉子さんらしいや』なんて言いながら。

「でも、僕の声の聞けたら十分なんだ。

……それって、告白だと受け取ってもいいんだよね？葉子さん」

「あ……」

きゅんと胸が絞り上げられるような感覚に陥った。完全に真純ペースに乗せられて、

彼を私の恋人として話をしている自分がいたのだ。

『だからどうだっていうのよ』とあわてて言った言葉は、さらに彼の言葉を肯定することになり、

二進も三進も行かない状態へと自分を追いやってしまった。

愛の告白どころか、彼を恋人扱いしてしまった。

呆れられてる？自意識過剰な女だと思われた？不安は渦巻いた。

だが、不安で荒れ狂う私の気持ちと反対に、彼は冷静な口調で言った。

「あの時のキス、僕はまだ覚えているよ…忘れられないんだ」

第35話

「そ、そんな……」

顔中、蒸したてのお饅頭のように火照り、気持ち是有頂天だった。もちろん返事は、『私も忘れてなんかないわ』そう言つつもり。あの時は、行き過ぎたと思っていたイメージトレーニングも、本物になるかもしれない……期待は、過剰に膨らんでゆく。

だが、はたと思考回路が止まった。

私は、課長の言葉を思い出したのだ。

すみません。羽並さんとは副社長の話をすると
言われているんです。

一体これはどういうことなのだろうか。

同じ人物から出たとは思えないまるつきり正反対な言葉、
プライベートな関係を切ろうとしている人の言葉ではないような気がした。

だったら、彼の言葉の意味は何だと言うのか。

身体が欲しいため……どんな状況でも、そういう風にだけは考えたくない。

でも、不安は広がってゆく一方だった。

「本当に、あなたはそう思ってるの？」

私は、ふたりの間に流れていた甘い雰囲気を通してしまうように怪訝な表情に変え、残り少なくなった Pasta 皿へと視線を落とすと、言葉を続けた。

「忘れなきゃいけなかったんじゃないの？」

あなたは、私とのプライベートな関係を切りたかった……でしょ？だから、私と副社長の話をしないように課長に命令したんじゃないの？」

「ええっ？なに言ってるの？」

真純は、驚いていた。
視線を上げた私の顔を覗き込んだ真純は、
右手に持ったグラスをテーブルへと置く。
まるで、彼の動揺が伝わったかのように赤いワインがゆらゆらと揺れた。

「『羽並さんとは副社長の話をするなと言われてるんです』
課長から、そう言われたわ」

私は、課長の言葉をそのまま話していた。
乗り出すように話を聞いていた真純は、『ああ』とため息をつき、
申し訳なさそうに苦笑した。

「あいつは、そのまま君に伝えたのか…ごめん。
商店街の目もあるし、彼との間で僕の話題が出ないように、
『羽並さんとは、僕の話をしてはいけない』と言っておいただ。
仕事とプライベートを別にするため、君との関係を切るためじゃない」

「…じゃなければこんなところに連れてきたりしないよ」

真純は、私のワイングラスを指し、飲むように促した。
安堵の気持ちでいっぱいになりながら、ちょっぴり辛口のワインを
飲み干すと、

彼の視線とぶつかる。

まるで、夜空に瞬く星のよういきらめく瞳が見える。

真純は、蝋燭の炎の向こうから一途な眼差しを私へ向けていた。

「気持ちだけでも、初めから伝えておけばよかったのかもしれない」

「好きだ。葉子さん」

彼からの正式な愛の告白。

胸に矢が刺さったような痛みが走ったあと、ジンと熱くなっていた。泉が湧き上がるように涙までもが溢れてきて、私は両手で目を覆い隠してしまった。

「どうしたの。嫌だった？」

優しすぎる言葉に、千切れんばかりに首を振った。

「違う……嬉しいの。私だってあのキスは忘れてなかった。だけど、あなたは帰国の日も言わずロスに行っちゃうし、課長さんからはそんなこと言われるし、平井さんという綺麗な人とはいい雰囲気だし……。私そんな魅力はないから、なんだか不安がとれなくてだから、凄く嬉しいの」

そう言いながら涙を拭いた私は、自分の背中と椅子の背の間においていたGUCCIのペーパーバッグを手に取り、小さく息をついた。誕生日でもなくクリスマスにも数時間早いけど、今がこのプレゼントを渡す絶好のチャンスだと思ったのだ。

「実は、あなたの香りを感じたくてこのラッシュを買ったの。プレゼントとして渡せば最高だと思ってた。」

25歳になったと同時に……開けて」

「……あなたを愛しています」

私の真剣な眼差しに答えるように目を細めた真純は、大きく頷いた。その場の雰囲気呑まれて凄く大胆なことを言った私の頬は、再び熱を帯び始めることになった。

第36話

雪は、まだ降り続けていた。

「今日は、泊まるつもりでしょうか？もちろん」

窓の外を見る私の背中から覆うように、真純は抱きしめてくれた。午前零時とともにスプレーされたちよつときつめのラッシュユが、私たちを包み込む。

あと数十時間後には日本とロスとでまた離れ離れになるふたり。だけど、彼と離れてしまっても、

この移り香が彼との気持ち繋げてくれるような気がした。

私は、とても幸せだ。

『もちろんよ』と言わんばかりにゆっくりと頷くと、彼の温かい頬が私の頬に優しく当てられた。

トゥルルル……。

私たちの甘い雰囲気壊すように、携帯電話のベルが聞こえてきた。その音は、リビングのソファアールにかけられた真純のジャケットからで。

彼は私を抱きしめたまま、じつとその音に聞き入っていた。

そのベルは、7回高々と鳴り響いた後、プツンと切れた。

「ごめん……、緊急の呼び出しだ」

真純は、ゆっくりと私の背中から離れると頬に軽くキスをする。

そして、ソファアールに歩み寄りジャケットから携帯電話を取り、私に背を向け話し始めた。

「恩田ですが……、はい、はい……。そうですか、業者には？」

…えっ、はあ？それじゃ間に合わないでしょう。

明日の10時から、競技大会は始まるんですよ！

ウォーミングアップも出来ないじゃないですか。

ああ、下に言っても埒あかないな。僕が上に電話しますから、支店長は待機しててください」

電話の内容を聞くつもりじゃなかったが、彼の大きな声に内容は筒

抜けだ。
ちよつと怒ったような口調。トラブルのようで嫌な予感が頭を過ぎ
つてゆく。
それを浮き彫りにするかのようには、真純は電話を切ると深いため息
をついた。

「FIEに戻ることはなかった」

本日午前10時、国内の各FIE支店から選抜された水泳会員の記
録会有一些という。
年に一度の大々的なイベントなのだが、プールの水を温め循環する
装置の故障で
大変な騒ぎになっているとのこと。
業者に修理を依頼するが、専門の者が出張に出ていると言ふことで、
夜が明けないと修理ができないと言っているようだ。

すぐに、真純は業者の社長に連絡を取り、
冷静ながらも怖いくらいの口調で話した。

「そちらの装置は最新のコンピューターで性能もよく、
私共も安心して使わせていただいてました。
でも、いざという時のアフターが悪ければ、これからの取引は難し
くなるでしょう。」

そちらの従業員の話からすると、この真冬に水入りのプールで泳げと
言っているようにしか聞こえない。循環するのにとれくらい時間を
を要するか、

社長なら分かっていただけだと思いますが……いかがです？社長」

真純は、耳に携帯電話を当て肩で挟みながらワインレッドのネクタイを首にかける。

鏡を覗き込みながら器用に結んでいった。

「そうですね。そうしていただくと助かります。はい、では後ほど」

パチンと電話が閉じられると、寝室にあるウォークインクローゼットから

黒のロングコートを出し羽織る。

そして、私の元に近づくと再びギュッと抱きしめ、耳元で囁いた。

「帰りは早朝だろう。ほんとにごめん。

寂しいけど、ゆっくり休んで、帰って来なかったらそのまま帰ってくれ」

とても、寂しかった。

せっかく彼と気持ちを通じたのにまた離れ離れ。だが、仕方がない。彼はこれから寝ずに明日の大会のためのプールの修理に立ち会うのだ。

私は心に何度も何度も言い聞かせる。そして、にっこりと笑った。

「頑張つて、真純さん」

「ああ、君のラッシュユがあるから頑張れる」

真純も微笑を返しながら、私の肩を掴み身体から離れた。

私は、大きなガラス窓を覗き込んでいた。

真綿の雪が降り続く中に、玄関から出てきた真純の姿が小さく見える。

視線が届いたのか、2、3歩歩いた彼は、顔を上げこちらに視線を向けた。

大きく手を振ったがさすがに見えないようす。

踵を返されると、私の心は、絞り上げられるように痛み、きゅんと切なくなった。

そして、最終電車が待つ地下鉄の駅に、

黒いロングコート姿の彼は吸い込まれていったのだった。

第37話

広すぎるベッドに、私はひとりごとと寝転がった。

柔らかいスプリングが身体を包むと、あまりの心地よさに胎児のよ
うに丸まる。
ひとりになって寂しいけれど、
真純の告白と、彼が枕につけてくれたラッシュユの香りがその気持ち
を紛らせてくれた。

僕の携帯番号、何かあったら電話して。折り返し連絡するよ。

真純はそう言った後、数字を書いた紙を渡してくれた。
プライベートの携帯。

家族と親しい友人にしか教えていないという11桁の番号は、
今日から私の宝物となった。

枕の下に忍ばせているその紙の数字を口で暗唱してみると急に睡魔
が襲ってくる。

『彼が帰ってくるまでは、起きておこう』そう思っていたのに、
いつの間にか意識は途切れてしまった。

夜は、とても長く感じた。

公園や遊園地で真純とデートする夢ばかり見ていた気がする。
内容は覚えていないが、とにかくいろいろなシチュエーション
まるで映画館のスクリーンで見ているようであった。

満足気分に包まれた私は、カーテンの隙間から射し込む朝の光で目

が覚めた。
それは、まるで映画のフェードインのよう。
ぼんやりとした視界は目が覚めるにつれはつきりとしてきて、
穏やかに波打っていた心臓が、目の前の現実を見せつけられドキッ
とバウンドした。

ま、真純さん！

すぐ目の前には真純の顔があつて、耳の下には彼の腕枕。
いきなりの大接近に、心音は激しく鳴り響き、
嬉しい悲鳴を上げてしまいそうになっていた。

いつ帰って来たのか分からないが、
熟睡している彼を見ると、ほんの今しがたなのだろう。
きつと、寝顔なんかも見られて、額にチュッなんかされて、
私が起きないように注意しながら頭の下に腕を差し入れてくれたの
かな……
なんて、既に妄想は独り歩きをしている。

私は、ポカンと口を開け彼を見入る。

茶色い髪からは洗い立てのシャンプーの香りがし、
彼の頬からは、洗顔料の香りがした。
真純の顔立ちは、眠つていても綺麗で見惚れてしまえばかりで。
もっと見ていたかった、だけど……。

うそおー！！

私は、枕もとの時計を見て慌ててしまった。

もう午前8時、今日は年末外泊する母のために店と自宅の大掃除をするつもりでいた。

だから、朝から母の病院に顔を見せるつもりであったのだ。

すっかり寝坊をしてしまった私は、ベッドからそろりと抜け出し、着替えをするために寝室を後にした。

相変わらず、真純はぐっすりと眠りについていた。

帰る仕度が整った後、最後の見納めだとベッドサイドに座り込み、彼の寝顔を眺める。

年初めにある説明会。

私はそこで、買収を伝えるつもりでいる。

だから、その後会うときは、敵味方の障害もなくなり、彼との本当の一夜を共にすることになるだろう。

この綺麗過ぎる寝顔も、身体も、彼の全てがひとり占めできるのだ。それは、恋人だけが持てる、素敵な特権だった。

私は彼に刻印をつけるように、真純の頬に唇を当てた。

「真純さん。また来年……ロスで良いお年を」

そして、疲れている彼を起こさないように、こっそりと部屋を後にした。

『どづして、起こしてくれなかったんだ』

電話口の真純の声は、ちよつとむくれていた。

君の顔を見たかったのに、彼はそう言っただけのため息をつく。

なんだか一足早い恋人のような会話に、胸が弾むような気がしていた。

そして彼は、取りにいけないんだけど前置きし、私に花束のアレンジを頼んだ。

どうやら、知り合いの年配女性が母と同じ病院に入院したらしく、

明朝お見舞いに行くということだった。

私は相手のイメージを得るために、彼にどんな人かを聞く。すると、2、3秒無言になった後、真純は言った。

『そうだね。そうそう、君のお母さんをイメージしてもらったらいいかもしれない』

一番分かりやすいイメージだった。

「だったら任せておいて」

意気揚揚で彼に伝える。すると、更に彼はこう付け加えた。

『ああ、葉子さんのお母さんとも会えたらいいのにな』

真純は、母のことも気にしてくれていた。

彼のためにも、外泊の際に母を説得しなきゃいけないと思った。

彼を信用していないわけではないが、真純のちよつとした言動から勘のいい母に知れることも考えられるのだ。

順序が逆になり、話が拗れる事を恐れていた。

母に言ったら、彼と会えるようにセッティングするつもり。

だから、ひとまず真純にはこう告げた。

「絶対駄目よ。私を買収のこと話したら、
いっぱい会わせてあげるから。それまでは我慢して」

『えーっ、冷たいな。そんなこと話さないのに』

「えーなに？もしかして、私より母が好きなの？」

『そうだね。お母さんは、頑固じゃないからな』

「なによ、それ。母は、人当たりがいいだけよ。怒ると怖いし、頑固一徹よ」

『じゃあ、君とそっくりなんだ』

「もう!」

無言になった私を、真純は大笑いする。

電話口で頬を膨らしながらも、なんだが幸せだった。

喧嘩のうちには入らないが、なんだか痴話げんかみたいな雰囲気。凄く身近な存在になれたことを表しているようだ。

私は、こんな幸せが永遠に続いてくれることを心の底から願っていた。

第38話

昨日、一面銀世界だった街並みは元へと戻り

雪はほとんど溶け、路肩に少し残るばかりとなっていた。

マヒしていた交通機関も復旧し、

朝の通勤ラッシュで人も車も多かった。

ほんの二駅違いなのにここは都会で、

うちの商店街周辺では考えられないほどのざわめきにびっくりする。

私はその混雑を縫うように歩きながら、病院へと向かった。

「おはよう、お母さん。ご飯食べれなかったのね

今日は調子悪いの？」

箸もつけずにテーブルに置いたままの朝食を引きながら、母に話しかけた。

「うん……まあね」

気だるそうに返事をしながら寝返りを打ち

私のほうを見た母は、まるで犬のように何度も臭いを嗅いでいる。

「あなた、昨日家に帰ってないの？着替えてないんじゃない？」

「えっ？何か臭う？」

ドキツとした。

考えてみれば、私の服は昨日と同じ服だ。それに。

「真純君と同じ匂いがする」

なんて、ラッシュを言い当てられてしまったのだ。

「ん、な、何言ってるの。そんなわけないじゃない」

一夜のうちに自分では匂わなくなっていた真純のラッシュを、母はズバリ当てていた。

今までただ一度しか彼には会っていないのに嗅ぎ分けるなんてお見事だと拍手を送りたい。

だけど、返事に困ってしまった。

そう朝帰りなの……と母に白状する事も出来ず、肯定は出来なかった。

えっちはしてないといっても、信じてくれそうにもないし、娘の朝帰りだなんて、想像したくもないだろうし。

「昨日は、友達の家泊まったの。香水は、電車で付いたんじゃない？」

もうちょっと秘密にしておくため、苦しげな理由付けをしながら、そそくさと膳を片付けた。

「明日から外泊でしょう。早めに迎えに来れるように、今から大掃除するつもりなの。誕生会の準備もしておくわ、楽しみにしててね」

私は母にそう言いながら、彼女の身体を蒸しタオルで拭いた。

そう、明日12月26日は母の誕生日だ。

毎年ささやかながらではあるが、ケーキを囲みふたりでお祝いするのが恒例となっている。

「だから、元気に外泊してもらわなきゃ」

「出来れば良いけど」

「何、言ってるのよ！気合で帰って来てもらわないと困る。私、ずっとひとりきりで寂しいんだからね」

弱気な返事をする母を叱咤しながらも、寂しい本音がチラリと口に出ってしまった。

本当に寂しい。

母がフツといなくなってしまうんじゃないかという不安は、いつ何時だって心を過ぎり続けている。

その気持ちを吹っ切るために、医者のお知らせがはずれ、何年も何十年も生き続けて欲しいと願っているのだ。

そのためにも、母には元気な姿で帰ってきてもらわなければいけなかった。

「そうよね。元気になって帰らなきゃね。葉子……」

母の言葉の余韻は、風となって私の胸の奥に入り込む。

なんだか、ざわざわと心が騒いでいるような感覚に陥った。

病院から帰宅し、店と自宅の大掃除が終わり一息ついたのは、陽が落ちた後だった。

私は淡いピンクの薔薇とダリア黒蝶、茶色のアンズリウムを使ったちよつと大人向きの花束を作りFIEへと向かった。

電車の中では、ぼんやりと流れる景色を見ながら、

『FIEで偶然にも彼に会えた』という設定でありえない空想にふけていた。

夜のFIEの受付は、女性達ではなく数名の男性に交代していた。話に聞いていたようで、花束を持つ私を見るなり深々とお辞儀をされる。

「羽並様、お疲れ様です。そちらの花束ですね。」

副社長の代わりに、わたくしがお預かりいたします」

そう言いながら、ひとりの男性がカウンターより出てくる。

やっぱり、真純とは会えないのだと悟った。

「あの…。副社長は、いらっしやらないのですか？」

答えは分かってはいるが、一応聞いてみた。

「申し訳ありません。副社長は重役会議に入っております。花束の料金はこちらでお支払いいたします」

「あ、すみません」

私は、残念な気持ちで真純宛の請求書をその男性に手渡す
『そちらにお掛けになられて、暫くお待ち下さい』と言いながら、
彼は花束を受け取り、事務所へと消えていった。

私は、受付横にあるソファアームに座ると天井を見上げていた。

この上に真純がいるのかもしれないと思うと、

テレポーテーションして彼の元に行きたくなる。

目を閉じて会議中の真純を想っても、それだけでは物足りなかった。

第39話

「もしかして、私ってストーカー？」

私は、花束を届けた後FIEの隣にある喫茶店にいた。会議がすぐ終わるとも考えられないし、会えるはずはないのだが、なんだか彼に会えるような気がして、ここから離れることが出来なかったのだ。

次の電車の時間まで……そう思いながら、既に4度の電車を見送っていることになる。飲み干してしまった珈琲のお代わりを店員へと告げた私はこれで帰途につくことを心に誓った。

午後21時。

隣の大きな窓からは、FIEの通用口が見えている。

職員も少なく入り口は閑散としており、明るい照明の下、警備員がひとり暇そうに立っている。その警備員の人間ウォッチングを楽しみながら、温かな珈琲を喉に流し込んでいた。

すると、通用口前にいかにも重役が乗り込みそうな黒塗りの車が止められる。

ある確信が過ぎり、心は逸った。

「あ……」

車の陰に隠れて見えにくくなった入り口向こうの情景を見るため、目を凝らす。

そこには、真純の姿が見え隠れして

……次第にその姿は大きくなり、通用口に差し掛かる。

私は席を立つとお金を払い、無我夢中で走り出した。

真純は、片腕に花束を抱え、もう片手には携帯電話を持った姿で歩道を歩いている。

彼の背中まであと数歩の距離。

私は彼の背中を叩こうと、手を伸ばした。

真純は、土地の話をしていた。

「……羽並花屋のほうも手ごたえありますから、買収は終わったも同

然です。

遅くても、来年の桜が芽吹く頃には着工出来るようにします。

……えっ？母親。ああ……駄目ならばまた対策を練らないといけな
いでしょうが、

心配は要らないでしょう……」

出した手を引っ込めた私は、淡々と話している真純の背中をジッと
見つめた。

彼は気付くことなく開けられたドアから後部座席へ乗り込む。

携帯を片手に資料を出し見ている彼の横顔は、
以前FIEを名乗った時と同じ表情であった。

車は、滑るように動き出した。

私は結局、彼に声掛けることが出来ずに立ち尽くしたまま。

仕事とプライベートを割り切っている真純。

当然のことながらも、事務的に進められる会話に寒々としたものを
感じていたのであった。

私は、布団に寝転がり真純から貰ったメモを見ていた。
あのスイートルームとは全く違うせんべい布団は凄く冷たくて、心
まで寂しくなる。

「やっぱり、電話してみようかな……」

ようやく決心が付き、ムクリと起き上がった私は、電話の受話器を
とる。

きちんと正座をして、心のドキドキを抑えた。

きつと、プライベートの彼の温かな声を聞いたら、

心の寂しさやなんとなくの不安も消えてしまうだろう。

「090……」

ひとつひとつの番号を押してゆく。

緊張のあまり最後の7が押せなくて、手が震えた。

プルプル……

だが、コールを2回聞くことなく、事務的な女性の声で案内が始まったのだ。

「……………只今電源を切っているか、電波の届かない場所に……………」

これがどういう状態なのか、携帯を持たない私でも知っている。詩織がよく使う手だ。

手が離せないときや出たくない時に、コールの途中で電源を切る。すると、こんなメッセージが流れるのだ。

『今どき、電波の届かないところなんてエレベーターの中か、山の上ぐらいよ。』

こんな案内流れたら、相手は嫌がってるって思ったら良いわ』

詩織の話が全てなら、今真純は電話に出たくないということになる。

もう、23時が過ぎていた。

未だ仕事が忙しいのか、プライベートで出れない状況にあるのか。それしか考え付かなかった。

折り返し連絡するよ。

あとは、着信履歴に彼が気付いてくれるのを待つしかなかった。

「待つ身って、辛いわね」

結局、日付が変わっても真純からの連絡はなかった。

「わ〜ん、遅れちゃった」

母の誕生会で食べる料理の仕込みに夢中になりすぎて、母の病院に着いたのはお昼過ぎになっていた。

朝の電話では元気で楽しみにしていると聞いていた母。きつと、遅いと怒られるに違いない。

息を切らしながらナースセンターにたどり着いた私は、

慌しく働いている看護師に声をかけた。

「羽並ですけど、外泊のお迎えに……」

その声に敏感に反応した看護師は、青ざめた顔をして私に声を上げた。

「羽並さん、お母さんが急変したの!」

「えっ?」

自分に起こったことだと理解するのにやたらと時間がかかった。時間が止まったかのように身体が動けなくなる。

まるで冷水を浴びせたかのような冷や汗が、背中と掌に浮き出していた。

「早く、行って」

背中を押され、ようやく足が動き出す。

私は、母のいる病室へと走り出していた。

第40話

母の昏睡状態は、ずっと続いていた。

呼びかけにも、痛み刺激にも、全く反応がない状態。

私は、母の傍らに付き添い名前を呼び続けた。

何かのテレビで聞いたことがある。三途の川を歩いていたら呼び止められ、

奇跡的に助かったのだと。

そんな川を見ているかもしれない母へ、必死に訴えた。

「羽並さん、少し休まなきゃ」

朦朧としていた私は、看護師より肩を叩かれた。

もう3日こんな状態が続いていて、精神的にも身体的にも限界のはず。

だが、闘い続けている母のため、自分だけ楽になる事は出来なかった。

『葉子、そろそろ孫の顔を見せてよ』

母の声が聞こえてくる。

ここは、はなみ花屋。

私は、今の季節には無いはずのチューリップの花束を作りながら振り向いていた。

なんだかとても幸せに満ち足りた気持ち。

そして、私の口からこんな言葉が出てきた。

「焦んなくても、もうすぐ見れるわよ」

『もしかして』

「そうよ、お母さん。真純さんとの赤ちゃんができたの」

その瞬間、これは願望が見せる夢だということに気付いていた。現実を逃避するための夢だと。

『葉子、よくやったわ！葉子……葉子』

母の声が頭の中に響く。

そして、幕が降りるように、視界は真っ暗になっていった。

「葉……子……葉子」

耳に遠く母の声が聞こえていた。

どうやら、まだ夢を見ているみたい。

それにしても何度も声かけられていて、私は、重たい瞼を開けた。

心電図のモニターの音がはっきりと聞こえてきて、

ここが現実だと教えてくれる。

まず目に入ったのは、ベッドに置いた私の右手。

その手の上には母の手が重ねられてあり……。

その現実には、ぼんやりとしていた意識がはっきりとした。

「お母さん……！」

頭を上げるとベッドに休む母の顔を見た。

母はうつすらと目を開けこっちを見ていた。

「ああ、お母さん気がついたのね……よかったあ」

私は安堵した。この声が母の耳に届いたのだ。

「よかった。本当に良かった。お医者さん呼ぶね」

ナースコールを押す手を、母はキュッと握り締めた。

母は何かを言いたそうだった。

しきりに口を動かしていて、どうしたのと言いなながら母の口元へ耳を寄せた。

「葉……子……」

途切れがちな母の声を、必死に受け止める。

「分かるわよ。何？お母さん」

私は、母の手をギュッと握り返し何度も頷いた。

「……あの土地は……F I Eに譲りなさい……。守る必要は……も
うない」

そして、母の白い手は、全ての力を出し尽くしたかのように私の手からするりと落ちていった。

「おかあさん？ちょっと、ねえ、どうしたのよ」

私の声と同時に、モニターのアラームが、けたたましく鳴り響いた。ドアから入ってきた医師と看護師がその様子に驚き、母から私を引き離すと
大きな機械と看護スタッフが私と母の間に割り込み、ふたりの空間を引き裂いていく。
スタッフ達の血の気が引いたその表情、
ようやく、私は、母の状態を悟った。

「ねえ、おかあさん。何か言ってよ……」

私は、わめくことも出来ないまま、腰が抜けたように床に座り込んでしまった。

母の瘦せた手の感触だけが、しっかりと私の掌に残っていた。

母の魂は一体どこに行ったのだろっ……。

看護師より母の身を綺麗にしてもらっている間、私は病室の整理をしていた。

何の感情もわきあがらず、まるでロボットのようになんまりと作業をこなしてゆく。

すると、カーテンに隠れて気付かなかったが、キャビネットの上に花束が飾ってあるのに気付いた。

それは、どこかで見たことがあった。

「こ、これは……。私が作って真純さんに届けた花束。どうしてここに？」

紐組みを使う花屋なんてそうないし、

アレンジから包装紙から自分が作ったものとそっくりだったのだ。

私は、花束を手にとった。

まだ活き活きとしているダリアに、どうしても真純の姿を重ねてしまつて頭を振る。

すると、花の間からカードがひらひらと落ちてきた。

『Happy Birthday!』

床に落ちたのは、真純のサインが入ったそのカード、間違いない彼が残したものだ。

誕生日なんて知らないはずの彼が……いや、それとも知っていたとでもいうのか。

そうだね。そうそう、君のお母さんをイメージしてもらったらいいかもしれない。

真純が花束を贈りたかった年配女性というのは、実は母だった？
一体どういうことだと頭が混乱する。
頭を手で叩きつけながら自身を落ち着かせようとしたが。

えっ？母親。ああ……駄目ならば
また対策を練らないといけないでしょうが、心配は要らないでしょう。
う。

携帯に向かって淡々と話す真純の言葉を思い出し、
そして、追い討ちをかけるように、母の最後の言葉が浮かんだ。

……あの土地は……FIEEに譲りなさい……守る必要は……も
うない。

買収を母に教えたのは、真純だった。

足がガクガクして止まらなくなり、床に座り込んだ。

「彼に言われ、母は死ぬまで土地のことを気にしていたの？」

頭がおかしくなりそうで、自分の手でかきむしる。

まだ生き生きとした毛髪が抜け落ち掌にまとわりついた。

「真純さん……どうして」

悲しさと悔しさと失望とが入り混じった涙が、洪水のように溢れ出
した。

胃の中を針でかき回されたような痛みが走り、
そこから湧き上がるような吐き気に襲われた。

第41話

つかの間の、母とのふたりきりの時間だった。

祭壇の前に寝かされた母の亡骸。
顔にかけられた真っ白な布が、痛々しく母の輪郭の凹凸を見せていた。

頭の中では、真純に対しての怒りと母への悲しみが
交互に浮かび消えていく。
死の直前に土地を譲れと言うしかなかった母の気持ちを考えると不
憫でたまらず、
彼と会わせてしまった事を後悔していた。

トゥルルル……。

静まり返った部屋に、電話が鳴り響いた。

耳の奥にまで入り込むその不快な雑音に顔をしかめながら、私は受話器をとった。

『葉子さん？ああ……ようやく繋がった。真純です』

それは真純だった。

懐かしい声に、一瞬だが聞き惚れている自分がいた。だがすぐに、胃がキリキリと痛み始め、現実を叩きつけられる。

『こないだは、連絡貰ってありがとう。
ロスについてから連絡入れてたんだけど、ずっと不在で。何かあったの？』

どうして彼は、こんな悠長に私と接することが出来るのだろうか。
罪悪感の欠片も無いなんて、意図的なものなのか？
それとも、よっぽどの鈍感な感覚の持ち主なのか。
深呼吸をして気持ちを整えた後、電話口で問いかけた。

「花束は、喜んでくれた？」

案の定、その問いに真純は暫く返答できないでいた。
そして、『実はね』と息をついた。

『あの花束、君のお母さんにあげてしまったんだ。気付かなかった
？』

私は、無言のまま言葉の続きを待った。

『ごめん、会っなくなって言われてたけど、
花束をあげる予定の人が君のお母さんと同じ病棟で、
そこで、たまたまお母さんが誕生日だと知ったんだよ。
で、あげたんだ。』

……あの花束は、お母さんのイメージで作ってもらったから、
誕生日の彼女にあげるのが一番だと思った』

『ごめん、勝手なことをして』

彼はそう付け加えたが、全ての言葉が言い訳にしか聞こえなかった。いつそのこと真純らしく、母を利用したんだと言ってくれたほうがすっきり終わったのかも知れないと思った。

「…本当のこと言ってよ。母を利用したんだって」

『えっ?』

怪訝そうな真純の声が聞こえてくる。

『葉子さん?なんだか変だよ』

どこまで知らぬふりをするんだろう
抑えきれない怒りが湧きあがってきた。

あなたのせいだ……母は……!

汗をかいた掌をグッと握り締める。胸に強く押し当てると
息苦しくなった。

『葉子さん？』

涙が出てきて、口元までが震えてくる。

……あの土地は……FIEに譲りなさい……。
守る必要は……もうない。

母のかすれゆく言葉を思い出し、震え続ける唇をゆっくり開いた。

『どうしたんだ、泣いてるの？』

「あなた、母に何を言ったのよ……」

『えっ？』

母に買収を伝えた彼に、どうして一から十まで話さなければならぬのかと思った。
母の死は知らないとしても、この険悪な雰囲気の原因が買収の件だと察することくらい出来るはずだった。

「どつして母が、はなみの土地買収の事知っていたのよ……」

ようやく言葉に出来たものの、私は、気が遠くなりそうだった。涙に嗚咽が追加され、息が詰まりそうになる。その尋常でない私の様子に、彼の声が慌て始めた。

『葉子さん！何だつて？もう一度言って、ここ空港だからよく聞こえない』

今度は聞こえないふり？
心の中にあつた糸がプツンと切れたような気がした。

「どうして、買収の話をもが知っていたのかって聞いてんのよ！！
母は死んだわ。買収の話をしなから！」

私は、大声を張りあげ
受話器を投げるようにして電話を切った。

第41話（後書き）

すごく、お待たせしました。
久し振りの更新です！

第42話

「そろそろ閉めようか。もう0時過ぎたわよ」

「そうね。ありがとう」

母の通夜には、大勢の人が来てくれた。

ほんの一時間ぐらいまでは、

母との最後の夜を過ごす客人たちでいっぱいだったが、

今は手伝いで残ってくれている詩織とふたりきりになっていた。

詩織は、花屋の土間に降りるとシャッターを閉め始める。

だが、半分ほどでその手を止めた。

「葉子…、真純さんよ」

言いにくそうな彼女の声が聞こえたかと思うと、
シャッターをくぐる真純が部屋から見える。

彼は、店に入ると深々と一礼した。

「ご焼香させてもらえるか？」

「…どうぞ」

彼は、ブラックスーツに身を包んでいる。

私は握りこぶしをつくと、震えるほどにその手を握り締めていた。

真純が、小さな祭壇の前に眠る母の前に座ると、
詩織は気を利かせたようにバッグを持ち立ち上がった。

「葉子、私一旦家に帰るから、また時間を見て来るわね」

「ううん、午前も過ぎたから、もう帰って。」

「少しでも睡眠とらないといけないでしょ。」

「お葬式の受付してもらわないといけないし、」

「おばさんにもお世話かけますって伝えておいてよ。」

「でも、葉子のほうが休まない」と

詩織は、母が他界し天涯孤独になってしまった私のことを、
まるで身内のことのように心配してくれていた。

「私は大丈夫よ。眠れないし、なんだか元気。お線香も絶やさないと
わ」

「そう。でもね、携帯電源入れてるから、」

「夜中でも朝方でも電話して。いつでも交代できるから」

「ありがとう」

でも、詩織が言うような、眠いなんて感覚は全くなかった。

このまま眠らずに、何ヶ月も働けるんじゃないかというくらい元気だったのだ。

母が逝ってから、いろんな作業が待ち構えているもんだと思って気を張っていたが、現実には、どこから聞きつけたのか葬儀社の人が来て、

台詞のような言葉をかけられただけで段取りはすべて彼らがこなしてくれた。

私がする事と言えば、葬儀のときに使用するホールや祭壇、棺おけ骨壺をまるで通販本のようなカタログを見ながら決めるだけ。それはなんだか、あなたは精神的シヨックが大きいのだから力も頭も使う必要は無いんだと言われているような気がした。お金さえあれば良いのだと。

祭壇ひとつだつて、ピンからキリまで。高い金を出せば、ゴージャスな物で、ケチると見た目に冴えないものを、母に選ぶことになる。いくら母の魂は、残っていないんだと分かっている、最後だからとちよっぴりいいランクのものを選んでしまった。足元を見るような商法にまんまと嵌っている。

結局は、あの世もこの世も金次第……なのだと痛感していた。

「…じゃ、帰るね」

「おやすみ」

詩織は、後ろ髪を引かれるように何度も振り返りながら花屋を後にする。

詩織がいなくなると灯が消えたように、寂しくなった。

私は、ぼんやりと真純の背中を見つめていた。

焼香を終えた真純は、母の前で手を合わせ随分と長話をしているようであった。

私は、まるで作業のようにお茶をいれ、彼を待った。

「この度は、本当に突然のことで、
どれだけお心を痛められたことかと……」

全てが終わった彼は月並みな挨拶をし、
正座のままサラサラの髪が畳についてしまうように深々とお辞儀した。

私は、そんな彼の姿を睨みつけることしか出来なかった。

「……葉子さん、申し訳なかった。お母さんは、花屋の買収話を、父が送りこんだ土地買収のスタッフから聞いていたみたいなんだ。会ったのはただの一度だけだというが、お母さんは覚えていたんだろっ。

僕が名刺を渡した時点で、何しに来たのか分かっていたんだと思う」

そんな前から真純の正体を知っていただなんて、よけいに悲しくなった。

母はどんな思いで私たちを見ていたのだろう。

なぜ、最後になってあんなことを言ったのだろうか。

「母は、私に土地を譲れって言ったのよ。もう守らなくてもいいんだって

……そんな前から知っていたなら、どうして今頃になってそんな事を言うの？」

本当に、あなたは母と何も話してないの」

「ああ、FIEEのことは何も」

「ということは、母が欲しがっていた花束で、買収を煽ったということなの？」

頭を下げていた真純が、顔を上げた。

すぐく苦しそうな表情をしているのを見ると、

思わず目をそらしたくなった。

「僕自身は、誕生日のお母さんに喜んでもらいたかったただけだった。花束をもらうというお母さんの初めてを僕が努められたらいいと思っただ」

「でも、それがいけなかったんじゃない……。」

母はね、死ぬ間際まで買収のことを考えていたのよ。遺言が土地だなんてあまりにも酷すぎるわ。母を追い詰めたのは、あなたよ！」

言うてはいけないことを言うてしまつて、私は口を手で押さええた。

彼は、買収のことを煽つたつもりでもなく、母も決して無理強いされたわけではないのだ、そんなこと痛すぎるほど分かつていた。

だが、告知よりもあまりにも早過ぎた母の他界。ぶつけようがない悲しみと怒りは、一番信頼していた彼に向けるしかなかった。

「う……、ごめん。言い過ぎた。ほんとにごめん、追い詰めたただな」

ひどいことを言い続けている自分に気付き、涙が溢れ始める。真純は、穏やかに笑うと首を横に振った。

「そういわれても仕方がない。君の言うとおり、僕の存在はお母さんに無言のプレッシャーを与えていたんだ。本当にすまなかった」

「真純さん……」

彼の言葉を否定することは出来なかった。

涙で霞をかけるように真純の姿が消えてゆく。

こんなに近くにいるのに心の距離だけが遠くに遠くに離れていくような気がした。

「葬儀は、明日の14時。梅光苑だったね。父もロスから帰ってくるから、ふたりで葬儀に参列したいと思ってる」

「ありがとうございます」

真純は、背中を見せながら、土間に並べてある革靴を履くと

私のほうに向かい一礼した。

キリリとした表情は彼の仕事の顔、最初は嫌悪感を感じたこの表情も、

いつのまにか好きな表情のひとつに加えられていたことを初めて知った。

「羽並さん、本当に申し訳ありませんでした。

14日の説明会でお話するつもりにしていますが、

土地開発に関しては白紙の方向でお話をさせていただこうと思っています。

なにせ突然の報告となりますので他の商店街の方からの攻撃も考えられます。

はなみ花屋さんにはご迷惑がかからないように全力を尽くしたいと思っております」

「白紙…！」

突然の報告。私は驚きの声を上げていた。

第43話

「白紙にするの?」

真純は仕事の表情のまま、私が渡したダレスバッグを受け取る。仕方がないとはいえ、その決断に複雑なものを感じていた。彼との繋がりのひとつでもあったこの買収。それが、消えること。

「ああ。『こんな形で買収が成立したとしても、わだかまりが残るだけ』」

そう役員会議で言い放った」

「そう……」

「皆、僕の判断が意外で驚いたみたいだ。人間ばいなんて皮肉も言われたし」

苦笑しながら真純は呟き、そして、私の名前を呼んだ。それはとても優しく、いとおしげで、
だけど今にも消え入りそうなくらい細い声に聞こえた。

「葉子さん……」

嫌な予感を感じていた。

というよりも、彼を罵った後から心に湧いた別れの予感が、
現実味を帯びてきたのだ。
今まで触れようとしなかったこれからのふたりの関係について、
真純の口から語られるのだと知った。

ふと、寿命がきてしまった蛍光灯の瞬きに気付く。
それは、彼の寂しげな表情を浮き彫りにしていた。

「結局……君を幸せに出来なかったね。ごめん」

胸が、キュンとした。

「全ては……………僕のせいだ」

言葉の端に、彼の気持ちが見え隠れする。

こんなにも罵った私のことを、まだ大事に思ってくれてるのだと思うと

切なすぎて胸が熱くなった。

そういえば以前、社長である真純の父がこんなことを言っていたと聞かされたことがあった。

『深入りした情のせいで、買収は成立しないんだ』と。

まるで占い師のように的中したこの言葉、もしかすると社長は、恋路までもが壊れると予知していたのではないだろうか。

買収とプライベートがごちゃ混ぜになったために起こってしまった出来事。

愛情を押しつけるように生まれてしまった彼に対する不信感は、あまりにも大きい。

そんな気持ちを持ったまま恋人関係が続けるなんて出来るはずがなかった。

「僕らの関係も白紙にしよう」

『別れよう』の方がまだ思い出に浸れてよかったかもしれない。だが、真純はあえて白紙という言葉を選んだような気がした。彼との出会いも、喧嘩したことも、あのキスも、全ては無かったこと……

恩田真純との思い出全てを断ち切れと言われたような気がした。

いつの間に落ちたのだろうか。

土間に落ちていた赤い薔薇の花びらを拾い上げた真純は、私の手を掴み、そつと掌に乗せた。

「今更、僕がこんなこと言っても信じてくれないかもしれないが、はなみ花屋は経営の仕方を変えれば、借金の返済が出来るくらいには建て直せると思うんだ。

君には生まれ持ったセンスがあるからそれを売りにしてもいい、君の花に癒されにきた客のために小さなカフェを開くという手もあ

る。

噂で客が増えれば、土地を売らなくても十分に生活していけるようになるよ。

お母さんを亡くして辛いと思うけど、

7日過ぎたら無理してでも店だけは開けてくれ。

きっと仕事が、癒してくれる」

「僕が力を貸さなくても、君なら、やれるさ」

真純はそう付け加えると、くるりと踵を返した。

握られていた手にスツと寒さを感じると、

彼の体温を逃さないように薔薇の花びらをぎゅっと握り締める。

「…さようなら」

別れの言葉をかけられ、心を握りつぶされたような痛みが走った。

きつと同じ気持ちも彼も持っているのかもしれない。

真純もまた背中を見せたままで、振り返ることはなかった。

そして真純は、店のシャッターをくぐり、

すっかり寝静まった商店街通りへと消えて行った。

結局、私は彼に対し、何一つ言葉をかけることが出来なかった。店に静けさが戻ると、張っていた気持ちがあつと抜けへなへなと土間に座り込んでしまう。

深々と冷えた土間が、私の足から体温を奪っていった。

「一体私はどうすればよかったの。」

おかあさん、あの時本当は何を言いたかったの」

願いが叶うなら、母ともう一度話したかった。

プー！。

母の旅立ちは、ぼたん雪が降る中行われた。

霊柩車が切なく響かせた車のクラクション。

その音が消えてゆく頃、母の遺影を持つ私の目に真純の姿が映った。

大勢の参列者の中に交じり、肩を震わせ男泣きする真純を隣に立つ顔つきのよく似た社長が支えていたのだ。

母のためにここまで泣いてくれるなんて思わなかった。

母を想う彼の気持ち、今頃になって伝わってきた。

第44話

「今年に入って、なんだか客が多いわね。
こんなに来るのって凄く久しぶりじゃない？」

正月明けそうそう、風邪で仕事を休んでいる詩織は、
なぜか人の家に転がり込んでいた。
彼女の言うとおり、今年になってからの花屋は客入りがよく、
今日だって午前中だけで20人ほどの客が来ている。
私知知っている限り、それは有り得ない数字で。

「葉子、なにか宣伝した？」

「するわけないじゃない。お金ないのに」

「そうよね。変ね」

確かに変だった。

宣伝もなにもしていないのに、客が増えるだなんて普通ありえない。一体何が起こったとでも言うのだろうか。

「でも、ありがたいじゃない。

きつと、天国のお母さんが導いてくれているのよ」

「そうなのかな」

それが、一番納得できる答えだった。

母は、命と引き換えに、神様へ願ったのかもしれない。

はなみ花屋を立て直してください……って。

だが、その理由を知ったのはその夜のことであった。

閉店準備の中、FIEの受付嬢が飛び込んで来たのだ。

「よかったあ、間に合ったわ。羽並さんアレンジ作ってください」

「は、はい？…あつ、FIEEの……」

彼女らは、私のアレンジを絶賛してくれた人たちだ。

あの時は、真純から店を教えてもらえないと言って嘆いていたのに、どうして、こんなへんぴな場所が分かったのだろう。

彼女らは、相変わらずハイテンションで、場が急に明るくなった。

「私は、この花を使って欲しい。

小さなウエディングブーケみたいなイメージで」

「あなたには、菊よ。私がブーケ」

「ふたりとも彼いないでしょう。創ってもらっただけ寂しいわよ。

私は、紅い薔薇で、副社長が送別会で渡していたやつ。値段は半値しか出せないけど」

コントのような会話が耳に入る。

私は笑いを堪えながら、少し時間がかかりますよと言いつつ、それぞれの好みと値段にあうアレンジを作っていた。

「みなさん、店を探すのに大変だったでしょう？」

こんなところまで来てくれてありがとうございます」

私は、アレンジをひとつ作り終わると次のアレンジのための花を選び出す。

「何言ってるんですか。大変なんかじゃなかったですよ。今年になってようやく、副社長が花屋の場所を教えてくださいました。よかったですよ」

「副社長が、場所を教えてくださいましたのですか？」

私は驚いていた。

彼女の言葉と、最近の客入りの増加に因果関係があるのではと
思い始めた。

「副社長は、FIEのお客様にも教えられたのですか？」

気がつくと、花を作る手が止まっていて
慌てて動かし始める。

「いえ、私達です。副社長が多忙の時、羽並さんの花が手に入らな
かったんです。

花を絶やすことも出来ないので、近所の花屋に代わりの花を頼んだ
ら、

クラブのお客様が『どうして花屋を変えたの？』って、
話を聞いてみると凄く気に入ってくださってみたいで

……だから、興味を持っていただいていたお客様には、
場所が分かった時点でお教えしたのです」

ようやく客が増えた訳が分かった。

真純が受付嬢に伝えた一言が、あつという間に噂で広がったのだ。

7日過ぎたら無理してでも店だけは開けてくれ。
きつと仕事が、癒してくれる

彼は身をもって、口コミだけで客が広がることを証明してくれたのだ。

彼の声が聞こえてくるような気がした。

一番大切なのは、客を満足させるその腕なんだと。

この腕を多くの人に知ってもらうため、

より集客が見込まれるFIEの一階テナントを葉子さんに勧めんだよ……と。

「お客様に教えていただいていたありがとうございます」

「何を言っているんですか。いいものは勧めなくっちゃ」

「スイーツのお店でもそうじゃないですか。」

本当に美味しければ、わざわざ足を運んでも食べたくなる。

『どこか美味しいところはない？』って聞かれたらつい教えちゃう。それが、人間の心理ってやつです。羽並さんが作り出すアレンジって、

受け取る側のことをよく考えてあるから、

嬉しい気分になるんですよ。私だけの花って気がして」

「ありがとうございます……。凄く嬉しい」

彼女らの言葉は私の励みになっていた。

母を亡くして落ち込んでいる場合じゃない、

もっともっと人のためにアレンジを作り続けたいと思っていた。

カレンダーは、14の数字に丸が付いている。

そう。今日は、FIEが土地買収から完全撤退する日だ。最後まで、説明会に行くか迷っていたが、多美子さんより止められた。

『あなた、恩田副社長が攻撃されるところ見たいの？

彼は、きっと、あなたを守るために自分が盾になるつもりよ。

行ったら同情して何を言い出すか分からないわ。止めておきなさい』

彼女の言うとおり、余計な顔出しをせず、この店でその日が過ぎ去るのを待つ。それが、最善策のような気がした。

私は重い腰を上げ、母の遺品を整理することに決めた。いつまでも、後ろばかりを振り返るのは止めようと思ったのだ。店も少しずつではあるが客入りが伸びてきているし、店の外にカフェを作る構想も浮かんできている。今日の休みで片付けるしか、時間は無かった。

私はまず、祖母の代から使っている母お気に入りの本棚の整理を始めることにした。退院した後、病室にあった雑誌やチラシなどそのまま放り込んでいたから、ぐちゃぐちゃだったのだ。

母が病室で読んでいたフロアリストという雑誌。その先月号を取り上げると、本の間から大学ノートが落ちてきた。表紙にはNO50と書かれてあった。

それは、母の日記だった。

第45話

NO50と書かれた母の日記。

大学ノートの中にきちんと整理して綴られている文章は、母の性格をよく表していた。

「おかあさんは几帳面だった。帳簿も綺麗につけてたし……。そんなところがどうして似なかったのかしら」

私だって母の真似をし、日記を書こうとしたことがある。

だけど、それは三日坊主に終わった。
帳簿は、店主として一応つけてはいるが、ほとんどどんぶり勘定に
近いものがある。
自分自身だって分かっている。経営者向きじゃないってこと。

私は、ノートをパラパラと捲った。

その内容のほとんどは癌のこと、
そして、はなみ花屋と私の将来の不安ばかりだった。

「ごめんね。頼りにならない娘で。……最後まで安心させれなかつ
たんだね」

そう問いかけながら、母の日記を掻い摘んで読んでいく。
だが、その不安ばかりの日記は、ある日を境に変わっていった。

「11月13日 天気はれ……そうそう、
確か母と真純さんが初めて会った日」

なんだか、遠い昔の初恋相手を思い出したような
そんなほろ苦い気持ちになりながら
私は、その日記をゆっくりと読み始めた。

【11月13日 天気はれ】

突然、娘がイケ面の男性を連れてきた。
私は、名刺を貰って驚いた。彼は、FIEの副社長。
FIEといえば、前に土地の買収を持ちかけてきた会社だ。
葉子は、彼の事を知って付き合っているのだろうか。
一体何を考えているのかと思ったが、彼と話してそんな気持ちはな
くなくなった。

なんだか、息子を持ったみたい。

おかあさん、おかあさんと親しげに呼んで、娘を褒めてくれる彼の事を私は好きになった。今度こそ上手くいって、結婚して孫の顔を……そんなことを思ったらワクワクしてきて、頑張っ て生きなきゃと希望が湧いてきた。

「もう！」

私は、母の日記を読みながら噴出していた。

母は、私たちの姿を見ながら、ひとり夢見ていたんだ。孫まで作り上げて。

「何が今度こそよ。彼と付き合っ てなんかなかったのに。完全に信じ込んでいたのね」

母の妄想壁にも困ったものだ……なんては言えない。

そついう私も、そんな母の遺伝子をしっかりと受け取っているのだから。

可笑しさを堪え、先に進んだ。

「なにになに……。 11月14日、天気曇りのち雨。

驚いたことに、真純君がひとりで病室に来てくれた。

えっ！真純さん真美ちゃんの退院の日も来たんだ」

驚いた。

彼は、ひとことも母に会ったなんて言っていなかったのだ。やはり、母を利用するつもりだったのか。

【11月14日、天気曇りのち雨】

驚いたことに、真純君がひとりで病室に来てくれた……。

真純君の第一声の『おかあさん』が、凄く心地よい。

一途に見つめる瞳は、まるで本当の母親に向けられているようなそんな錯覚にさせられる。

きつと、彼は身内に対してこんな優しい態度で接しているのだろうと推測できた。

そして、彼ってどうしてこんなに話を聞きだすのが上手いのだろうか。

いつの間にか、彼は私が中学時代クロールの選手だったことを聞き出し、

僕も好きなんですよと話してくれた。

彼は、いろんな話をしてくれた。

その中で驚いたのは、FIEが出来るきっかけだった。

彼の母は、彼が中学生のときに脳梗塞で左半身に麻痺が残っていたのだという。

身体に負担がないということで、学校帰りに母を連れて区民プールに行っていたのだが、道中が遠く断念。

そこで彼は、自宅にプールを作ってくれと父親にせがんだのだ。
結局は、その気持ちに父親が答えたことが、FIEの元祖だと笑っ
ていた。

彼は、心優しい男の子だ。

『だからおかあさん、僕が隣のFIEに連れて行きますから、
リハビリして歩けるようになりましょう。
医師の許可が出たら葉子さんに伝えてください』

彼は、そう言ってくれた。

なんだか、彼が言うとなんかに歩けるような気がしてきた。

「真純さん……」

彼はそんなことを母と約束していたんだと思うと、
なんとも言えない感情で胸が圧迫され、とても苦しくなった。

『おかあさんを利用して』彼は、その気などさらさらなかった。

あの時彼が言ったとおり、私が持つ怒りというエネルギーを出しつくし、

FIEに目を向けさせるための演出だったのだ。

日記には、私の知らない母の心が書いてあった。

生きる希望をなくし、ただ娘の幸せを待ち続けた母は、
真純さんと出会ってから、少しでも長く生きたいとの目標に変わった。

毎日がとても楽しくて、母は、何度も医師に
プールでリハビリをしないと訴えていたようだった。

母が急変する前の日記。

真純さんが花束を持って、母の元に訪れた日だ。

『12月26日、今日から外泊。朝来るって言ったのに
葉子はまだ来ない。何やっているのやら』

日記は、それで終わっていた。
次のページも次のページも真っ白で。
そして、12月29日午前4時に母は永眠した。

「真純さんのことは、結局書けなかったんだ」

母の誕生日、真純さんとの会話が書かれてあるかなんて思っていたのでなんだか、がっかりした。
私は、両手で日記を閉じ、ため息をつく。
すると、ノートの裏に厚ぼったい違和感を感じた。

「何か挟まっているわ」

不思議に思った私は、裏表紙を開けていた。
そこには、真っ白い封筒が挟み込んであって。
住所と私の名前。
母は、手紙を出そうとしていたに違いない。
私は、そっとその封書をあけてみた。

【葉子へ】

もう、真純君と正式な恋人になりましたか？

と、こんなことをいきなり書くのも変な話ですが、
12月26日、私の誕生日を聞きつけた真純君が、
突然私の元にやってきてくれました。
あなたに作ってもらったという花束を持って病室に現れたときは、
まるで、王子さまが現れたかと思うくらいにドキドキして。
なんだか、思春期に戻ったかのようなにはしゃいでしまいました。
いいおばさんなのに恥ずかしい限りです。

私は彼から、葉子さんと両想いだけれども、ある障害があつて堂々と付き合えないのだと聞きました。彼はその理由には触れなかつたけれど、直感で土地のことだと分かりました。

葉子は、私に心配かけないようにと黙っていたようですが、随分前から、土地の買収騒ぎが持ち上がっていることを知っています。

もちろん、真純君がその関係者であることも知っていました。

だけど、彼から1月14日が過ぎ、全ての障害がなくなつたら葉子の恋人として挨拶にきますと約束してくれたので、安心して報告を待つことにします。

こんなことを書いても、結局はいつもあなたに会うのだから話しちゃうだけねど……。

あまりにも、嬉しくて書いてしまいました。

彼が最後に言ってくれた『葉子さんの全てを僕に任せてください』という言葉が、彼の一途な性格を表しているのだと思います。

葉子。

もし、この手紙を見る機会があつて、まだ悩んでいるのだとしたら、彼の胸に飛び込みなさい。

彼は、あなた自身を見、アーティストとしてあなたの腕を評価してくれてる。

もしその結果、土地を売りあの店がなくなるということになっても、おばあちゃんと、私が授けたその技術は消えないのよ。

幸せは掴むものなの。

分かった？あんないい男、お母さんのためにも逃しちゃ駄目よ。

12月26日

親愛なる葉子へ

母より

手紙が小刻みに揺れ、涙の雫がぼろぼろと真っ白い便箋に落ちてゆく。

「馬鹿！おかあさんたら……。どうして、遺言が逃しちゃ駄目なのよ」

母は、土地のことを考えながら亡くなっていったのじゃなかった。恩田真純と出会ったことを幸福に感じ、娘の今後の未来を夢見ながら逝ってしまったんだ。

「ごめんなさい……。真純さん……。私、あなたの誠意を踏み躪ったのね」

母の真意を知っていたなら、彼をあんなに攻撃なんてしなかった。だがもう、時既に遅し……。だ。あんな別れ方をして、もう修復できない。

笑いなのか泣きなのか分からない嗚咽が出てきた。

「もう、終わったの。本当にバカな私……。もう、お母さんの夢は、叶えられそうにないわ」

……。

恋人関係は無理だが、FIEを建てる彼の夢は叶えることができる。そう思った。

私は、手紙をバッグに入れると自分の部屋へ帰り、クローゼットを開ける。

もう残り香などないはずなのに、ほんわりと真純の香りがして胸がぎゅっと絞られる感じがした。

「真純さん、まだ言わないで！」

溢れ出る涙を何度も拭きながら、私は時計を見る。

14時30分、もう説明会は始まっていた。

「お願い……！」

私は、ダウンジャケットを取り出し羽織ると説明会の会場へと行くために家を飛び出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7462i/>

私の彼は副社長

2010年11月29日21時19分発行